謎の彗星の正体は何であったろうか。作者は、この謎を解くまえに、読者諸君の声を聞きたい。黄金バットにたいする御注文と御批評を、どしどしお知らせ下さい。

（作者）



ゴォーッ、ゴォーッ、ゴォーッ。
突如、天地をゆるがす大音響とともに、マオー星めがけて突進しつつあった怪すい星が、天空の魔城に落下したのである。忽ちおこる狂乱の声も、一瞬のあとには、只眼もくらむばかりのこうこうたる白熱光のなかにつつまれてしまった。黄金バットのふりかざす、正義の杖のもとに、ひれ伏すかと見えたクーマ大王や、ナゾー一味も、白熱の光の謎にまきこまれてしまった。黄金バット、まさる、女王たちの運命や如何に！　第四篇「アデンのすい星」にて作者は諸君に物語ることにしよう。


黄金バット（第四巻）
永松健夫著
彗星ロケット出現す!!


1
ウハッ、ハッ、ハッ、クーマ大王よ、兇悪なるナゾーよ。なんじらの命運つきるときがきたのだ。いざ天にかわって うちとりくれようぞ。覚悟いたせ。
グワラ、グワラと くずれおちる天空の魔城の廣間は たちまち修羅の巷と化しさった。まさるが あわやモモンガーお熊を とらえようとしたとき、うるさくつきまとう クーマ人のために さまたげられてしまった。まさるとブクちゃんは、力をあわせてクーマ人たちを右に左にとっては投げ、勇ましくも たたかいつづけていた。
まさるさん、しっかり!! 僕がついているよ。そんなブヨブヨした蛸の化物なんかに負けてたまるものか。えいッ!! すいついたら離れない糊みたいな奴ですね。


「ウワッ、ハッ、ハッ、」と魔城に ひびきわたる黄金バットの正義の声に たじたじとなりながらも クーマ大王は、なにか心に期するものがあるのか、ハッタと 黄金バットをにらみつけた。おりしも、天空をゆりうごかしながら魔城めがけて殺到する白光の集團。
なにをッ! なにをッ!! 骸骨の化物め、なんじらごときにまけるクーマ大王さまと思いおるか。たわけものめが!! 今にほえづらかかせてやろうわい。ナゾーどの、あれなるスイッチをおしなされ。斜断幕が おりるのじゃ。おいそぎなされい。
こーりゃ、ナゾーめ、クーマ大王とやら。わがはいの百八十貫の鉄棒でいざたたきつぶしてくれようぞ。
にくい黄金バットだよ。お願 早く なんとかかたすけておしまいよ。
またしても、ちょこざいなり、黄金バット。クーマ大王さまと わがはいの威力をしらず とんで火にいる夏の虫とはこのことじゃ。どれスイッチをおしてやろうかの。


2
ナゾーよ、むだなあがきはやめるがよい。この魔城のあらゆる機械は余が破壊してしまったのじゃ。
なにッ！ なんと!! クーマ大王さま、それは大変。機械はバットめが こわしてしまったらしいですわい。
3
4
なにを ぐずぐずしておられるか。ナゾーどの、それは、携帯用外敵斜断機じゃ。この魔城には、まだまだ はかり知れぬ、偉大な文明セットが たくさんある。ためして みなされい。
5
ナゾーが壁の小機械の第一スイッチをおすと、これは不思議 小セットから たちまち もうもうと白煙が ふきだしはじめて、黄金バットを はじめ、まさるたちをみるみる白煙のなかに つつんでしまった。
ややッ！ これはどうしたことじゃ。一寸さきもみえぬわい。ナゾー、クーマ大王め姿をかくすとは卑怯な奴。いざ出あえ、百八十貫の鉄棒におそれをなしたのか。


6
このとき、はやくも クーマ城にちかずいた白光の集團は、ごうごうと とどろきわたる 大音響とともに いましも正と惡の 必死の鬪爭を つづけている魔城の 上空に到着した。
7
やがて、廣間にたちこめていた霧のようなものが うすれるにしたがって、ガラスのように、しかも飴のように透明にかたまって黄金バットのまわりにたちふさがった。
あっ彼奴らの姿は見えてきたけれど ちかずけない。變な壁が、出来ているわい。鐵棒でおせばへこむけれど もすぐまた もとのようになるぞ。
8
どうじゃ、ナゾーどの、われらが誇る透明壁の偉力は いかがなものでござる。あれ、あのように、ばかな人間どもが あわてているではござらぬか。
いや、天晴れなる大王さまのお手のうちナゾーはほとほと感心つかまつった。黄金バットめ、よい氣味じゃわい。


9
ウワッ　ハッ　ハッ、クーマ大王め!! しゃれたことをいたしたな。これなる黄金杖のまえには、汝らごとき力は、露ほどのねうちはないわい。
10
さっと身を躍らせた黄金バットの杖が空中にキラリと　ひらめいたとみるや、ほとばしる紫の光線とともに、透明壁は、ダラダラと雪のようにとけて　ながれた。
いざ、クーマ大王、天誅をくわえるぞ。かくごいたせ。そーれ、いくぞ……
ややッ！ややッ！とけてしまったわい。不思議じゃ。これはかなわんわい。
11
おおッ！しめたッ!! 壁がとけたぞ。よし、今の　うちにナゾーを叩きつぶしてやろうぞ。
12


13
黄金バットの杖は矢のように　はやく　クーマ大王めがけて　くだされた。さしもの　クーマ大王の命運つきたかと　みえたそのとき……
蛇王や　まさるも　えたりやおうとナゾーのもとに　おしよせた。蛇王の鉄棒は、ビューンと　うなりを　あげて、ナゾーの頭上めがけて　うちおろされた。
14
このとき、クーマ城をとりまいていた白光の集団は、空中にピタリと　とまった。奇々怪々。白光の集団は、奇妙な三本の足をもつ、球のようなもので　あった。


15
黄金バットの杖に追いまくられて、クーマ大王も、「ギャーオッ、ギャオーッ、たすけて呉れ。」と、獣にも似た悲鳴をあげてあちらこちらに逃げまどった。
16
この刹那、クーマ城の上空に静止していた、球体の足と足との間の大氣が、ものすごい勢で、球にむかってながれはじめた。
やい、ナゾー、こんどこそもう駄目だぞ。悪のむくいを今こそおもい知ったか。
大氣の渦のなかにまきこまれたクーマ大王とナゾーの身体は、クーマ城の上空にふわりふわりとうき上った。
17
ウァーッ！たすけて呉れい。わしは一切もう悪いことをやめる故命ばかりは助けて呉れ。


18
あら、不思議、二人の悪人は、みるみるうちに、球体にむかって すいこまれていった。逃がしてなるものかと、あとから ヒラリと おどり出た黄金バットはクーマ大王とナゾーのあとを追っていく。
大きな怪奇な球面の上は、マオー星の反射をうけて、月のように キラキラと かがやいていた。グーマ大王がその円型の窓に すいこまれ、次に ナゾーが すいこまれようとしたとき 間髪をいれず……
19
待てッ！ナゾー、クーマ大王、悪業つくるところなき、汝らの息の根をとめずに おこうか。待てーい。
黄金バットは、黄金杖を、ハッシとばかりに、ナゾーとクーマ大王めがけて投げつけた。生けるもののように黄金杖は、ナゾーの義足に からみついた。


20
あら、不思議、黄金バットの杖がナゾーの足にからみつくとみるやナゾーはピタッと空中に静止してしまった。
21
黙れ!! ナゾー、この期におよんで騒ぐのはやめい。悪名、天下にとどろいたナゾーににあわぬやつ。
ややッ! これはどうしたことだ。身体が釘づけになってしまった。
22
黄金バットの手がナゾーの足首をつかまえて、ひきずりおろそうとしたとき、突如黄金バットは伸びてきた巨大な鉄の爪。鉄の爪は、やにわにむんずと黄金バットの身体をつかまえてしまった。


23
ゴロロン、ゴロロン、黄金バッ下め、怪タンクの病氣全快じゃ。もう おまえごときに いじめられは せぬぞ。
24
黄金バットを わしづかみにした 巨大な鐵の爪は、じわりじわりと黄金バットを しめあげていく。
黄金バットよ、お前の威力も かなわぬのう。クーマ國の科學力はすばらしいものじゃ。怪タンクの あれほどの負傷も みごとに なおして與れて、ますます素晴らしい力を あたえて くれた。
25
あやうく黄金バットの手から のがれたナゾーも その奇妙な球の中に すいこまれて しまった。


26
ゴロロン ゴロロン ゴロロン エンヤ エンヤラと、怪タンクは、黄金バットを鐵の爪に つまみあげて、うれしげに 奇怪な球のあとを追ってまいあがった。見わたすかぎりのマオー星の上空には名も知れぬ星にまじって なつかしい地球が あわくまたたいて いた。
27
黄金バットよ、お前もいよいよ、袋のねずみとなったな。こんどは ぜったいに逃がさんぞ。いまにQの粉砕器にかけて、こなごなに してやるわい。
28
あれよ あれよと いうまに怪物Qのために、クーマ大王とナゾーをうばい去られ、追っていった黄金バットはその鐵の爪に つまみあげられた。再びあらわれた怪タンクに、呆然として いた、蛇王や まさるもその姿が上空に みえなくなったとき、ハッとわれに かえった。
默れッ！悪人一味のドブロクごときに ひげを とる黄金バット と おもうか。たわけものめ!!
おヽ！まさる君 黄金バットを怪タンクにさらわれて残念だ。だがまだお熊やお光がのこっているはず、すぐ みつけて つかまえようぞ。
そう、僕もナゾーに氣をとられていましたが、お熊やお光は、ドアの方へ 逃げていきました。地階へ いくつもりでしょう。


29
あッ！マオー星の女王さま、黄金バットがあらわれて王宮はめちゃめちゃにされてしまいました。早く逃げなさらぬと大變なことになりますわい。
いいえ、お嬢さま、黄金バットは、とても悪い奴で捕まったらどんなめにあうかわからないよ。
お母さま、わたくしたちは、ここを逃げなければならないの。どうして黄金バットは地球の人なのでしょう。捕まえて天ぷらにしてしまえばいいではありませんか。
そのありさまは床上テレビジョンで承知しております。けれども、クーマ大王さまは、、、Qにうつられたようすゆえ　われらも避難しましょう。
30
シビレーター（らせん状自動昇降器）に　のりうつった、クーマ女王ガマと娘のコマは、モモンガーお熊やムルビンお光とともども地階の秘密室へといそいで　いた。
31
あッ！お熊が逃げていく。そらあとを追いかけよう。
32
お熊やお光がどこへ　かくれたかと、探しもとめて、廣いマオー宮の部屋部屋を　のこすところなく　たずねていた　まさると蛇王は、シビレーターに　のりうつろうとしていた、四人のものをみつけた。


33
お熊がシビレータにのりうつる寸前に、蛇王とまきさるは、ひらりとシビレーターに　とびのった。そして蛇王は百八十貫の鉄棒を高々とよりあげて、お熊めがけてハッシと投げつけた。
うぬッ！　まてい！　悪婆お熊。お前らは逃がさんぞ。蛇王さまの鉄棒でもくらえ。
34
鉄棒は　うなりをあげて、お熊の頭めがけて落ちていった。
35
お熊さん、心配しなくても いいよ。クーマ人は　あんなものを　うけとめるぐらい平気なのさ。はら　みていて　ごらん。
うわッ！　大変だッ！　蛇王のやつ鉄棒を投げつけたよ。ガマ女王さまたすけて下され。あれに、あたってはお熊も　かないませぬ。


36
ガマ女王の蛸のような手がするすると伸びてシビレータの壁のボタンを押したかとおもうと……
ややっ!これはどうしたことじゃ
37
38
シビレーターの側面の数ケ所から目に見えぬ强力な光線がさっと出て、蛇王の鉄棒をかるがると空中にうけとめ、蛇王めがけて逆に落ていった。これは　クーマ國のマオー・イオンと名づけられた强力線の作用で　あった。
あっ!逆もどりしてきたぞ。
あれ!まあ、おもしろいね。あの重い鉄棒が逆もどりしていくよ。おゝっ!蛇王にぶつかるよ。
39
お熊さん、おもしろがるのは、まだ早いよ。いまに　もっと　もっと　おもしろいことをみせてあげるよ。ほらほーらね
40
ガマ女王のうすぎみ悪い手がふたたびシビレーターの壁の第二のボタンを押せば……


41
ガマ女王の手が第二のボタンを押すと、おゝ！シビレーターは途中から真二つに われて、蛇王 まさるの乗った部分は とりのこされて しまった。逆もどりして来た鐵棒をうけとめようと頑張っていた蛇王とまさるは、重心を失なって空中になげだされた。
42
まあ、いい氣味だ。あの山男めが、しょうこりもなく追いかけてくるから罰があたったのだよ。
エヘッ、エヘッ、わたしは これで胸がすーっとしたよ。あいつらは これから どこへ落ちて いくのかね。二度と生きかえらないように してやりたいよ。
まあ、お母さん おもしろいわね。きりきりまいをして落ちていくわ。下でぺしゃんこになれば人間の標本が出来るわね。
あんな奴らを ひとおもいに 殺すのは もったいないよ。ゆっくり せめさいなんで 料理して やろうよ。
なあにね。シビレーターは ところどころ から 分離出来るのさ。私らを追ってくるから あのような目に あうのだよ。



「ケッケッケッ、お前達はコーカス炉の中になげこんで、焼きころしてやるのだよ。」
ガマ女王がののしった。落ちていく二人の眼下に、地下室の厚い合金の扉が二人を呑みこむようにサッと開いた。


44
まさる君、つかまったか。えらいぞ。今たすけにいくから手をはなさないようにつかまっているのだぞ。
下は、コーカスの炎だ。おちたら命がいくらあってもたりないぞ。がんばれ!!
蛇王さん、だめだッ!! 身体があつくてたまらない。手がやけそうだッ!!
45
おゝ! それでも圓筒のまわりにかじりついているよ。だけどもう出口はないのだよ。ゆっくりあたたまっているうちに、こんがり黒こげになっておしまいよ。
46
ヒッヒッヒッ、ざまを見ろ!! まさるや蛇王の黒焼をみたら黄金バットがさぞ泣くじゃろうよ。
どれ、お熊さん、ひきあげようか。あいつらのためにとんだ、ひまつぶし、をしたよ。
クーマ國の機械を動かす源としてコーカス・イオンが使われている。その製造は、クーマ國の地底で大仕かけな機械装置で行われていた。蛇王とまさるはガマ女王の手で、そのコーカス燃焼爐の中になげこまれようとした。危機一髪、二人は圓筒のまわりにかじりつくことが出来たが……


47
まさるさーん こわいよ。僕だけ、おいていってしまってはいやだよ。まさるさーん、蛇王さーん、たすけてー。
まさると、蛇王を もとめて歩きまわっていた、ブクちゃんが シビレーターの降口まで きたとき、中からガマ女王やお熊たちの話し声が きこえてきた。まさる蛇王をコーカスの燃えているかまのなかへ、つきいれて、怪物Qへ うつって いこうというのだ。
48
ブクちゃんは、廣いクーマ殿の中で活躍しているうちに、いつしか蛇王やまさるの姿を見うしなってしまったのだ。
あっ！まさるさんたちが、かまのなかへいれられてしまった。なんとかして助けなければならないぞ。
あの蛸のば、けものとお熊婆たちは なんという 悪いやつらだろう。
49
よし、かまの中の火をとめてやれば よいのだな。どこかに 火をとめるボタンはないかなあ。
50
あら、お母さん、大變だ。また人間が ひとりのこって みているわよ。あいつも捕まえなければ いけないわ。


51
お母さん、あれは、、、人間のこどもらしいね。あれならあたしでも捕まえられるわ。追いかけていってもいいでしょう。ね、ね。
52
そうだね。じゃ、お前ひとつあいつを捕まえてコーカス爐のなかへほうりこんでおしまいよ。
53
ブクちゃんをみつけたクーマ大王の娘コマはシビレーターをおりて、ブクちゃんを捕まえようと追いかけはじめた。
54
あれッ！いけない。蛸入道のお化けにみつかったらしいぞ。まさるさんたちを助けねばならぬ大事な身体だ。にげろ、にげろ!!
55
おまち!! 變な人間だねおまえは!! つかまえて天ぷらにしてやるからお待ち!!
じ、、、じょうだんじゃないわい。待ってなんかいられるかい。子供の蛸入道さん、ここまでおいで、甘酒進上!! ヘッヘッ、子供のクーマ人ならこわくはないや。


56
まあ、なまいきな子供だこと。クーマ人は人間より三倍も足がはやいことを知らないね。
本當のゆで蛸みたいになっておこっちゃったよ。おもしろいなあ。
57
あら、この子供はブリキのような着物をきているので吸いつけないわ。こまったわ、こまったわ。
あれ、きもちの悪い手だよ。なめくじのような手だ。よしっ！こいつを生捕にしてやろう。
58
あッ！いたい、いたいッ！そこをはなしてちょうだい。コーカス爐のとめ方ぐらいわけはないわよ。たすけて——。
こら！お前がクーマ大王の娘ならコーカス爐の火のとめ方を知っているだろう。僕をそこへ案内しろ。しないと首をしめてしまうぞ。


59
まさる君。鉄棒をうけとめたからそこへのばすよ。今これにつかまって渡っておいで。なあに、ここはなんとかして逃げだせるから、もう少しの辛抱だよ。
60
ほら、わしの鉄棒をやるぞ。しっかりつかまるんだよ。もう少しだ。もう一寸手が伸びないかなあ。
蛇王さん、だめだ。いまつかまっているまわりぶちがあつくてもうつかまっていられなくなったよ。
燃えさかるコークスの炎の、むっとする熱氣が蛇王とまさるを焼きつけた。二人が、かろうじてつかまった、ま、わ、り、ぶ、ち、も赤く焼け、わずかにすがりついた蛇王とまさるの手をジリジリとやけただらせるのであった。一階と地階とのへだての床は大きくあけられて、真紅の炎は、メラメラと二人を呑みこむように、もえたっていた。
あッ! そうだ。黄金バットのおじさんを呼ぼう。黄金バットのおじさん、来て下さい。蛇王さんと僕があぶないのです。
61
返事がない。どうしたのだろう。僕たちの頑張りが足りないから黄金バットのおじさんが来てくれないのかなあ。


62
なんだい、さっきは僕より三倍も早くはしれるなんていばっていたくせに。はやくつれていかないと、又首をしめてしまうぞ。まさるさんたちが危ないのだ。ぐずぐずしてはいられない。
あら、そんなことを言ったって歩けないわ。原動器のあるところは、もうすぐよ。おとなしくしてちょうだいな。
あのシビレーターにのって地下室までいくのよ。
地球の人間はずいぶん臆病ね。もうそんなことはしないから安心していらっしゃい。
また、途中できられてはかなわないから、よく監視していてやるぞ。
64
へへエ、ずいぶん大きな機械がたくさんならんでいるね。
63
このスイッチをあげれば炉のコーカスの炎はとまってしまうわ。スイッチをあげてごらんなさい。
さあ、ついたわ。ここがクーマ城の機関室なの。ここで機械を操縦すればクーマ国中、どこへでも機械を出動させることが出来るのよ。
65


66
しめ、しめ、ありがたいぞ。これでコーカス蝋の火が消えればまさるさんや蛇王さんが たすかるぞ。僕の大手柄だって皆から ほめられるぞ。
67
68
喜んだ ブクちゃんが スイッチをいれた とたん、あッ！横の壁がさっと あき、物すごい いきおいで ブクちゃんは その中へ 吸いこまれて しまった。
あッ！ たすけてー！ あッ！ たすけてー！
69
そして、その中は 厳重な合金製の檻に なっていた。コマの ためにだまされた ブクちゃんは、まんまと とりこに されて しまった。
70
ブクちゃん、お前は よっぽど 馬鹿さんだね。クーマ大王の娘が、チンピラ小僧に まけると思っている ほうが、よほど どうかして いるのだわ。

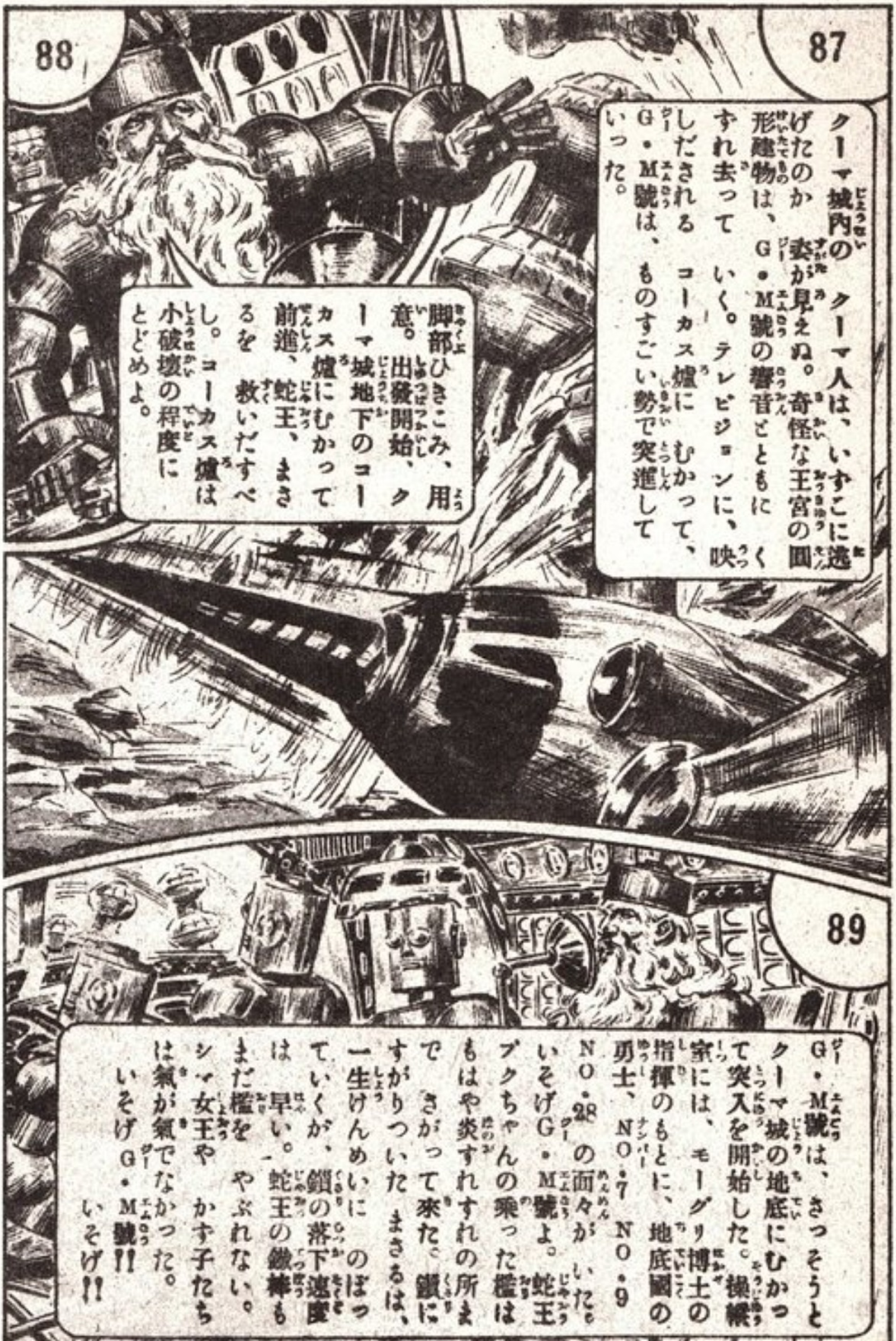

71
おやっ!まさる君上から変なものがぶらさがってきたぞ。あれにのって逃げろというわけでもなかろうになあ!
72
あッ!!まさるさんに蛇王さんがいる。まさるさーん。クーマの娘につかまえられてしまったのだよ。
73
おやッ!ブクちゃんじゃないか。かわいそうにブクちゃんまで捕まってしまったのか。
74
蛇王さん。かわいそうに、ブクちゃんだけはどうかして助けてやりたいなあ。ブクちゃんを焼きころしてしまっては、シマ女王にもうしわけがない。


75
よしっ!!ブクちゃん、俺たちも、今 その檻に とびうつるぞ。さあ、とぶぞ。ブクちゃん、ゆれるから しっかり檻に つかまって いるのだよ。
蛇王さん、あの檻に とびうつろうよ。
まわ、りぶちから 手をはなし、ブクちゃんの いれられた檻めがけて空中に
せた。
76
77
あッ!! うれしい。こ、こんどは、はんたいに、まさるさんと、蛇王さんが たすけに 来てくれるぞ。
おっ、下には コーカスの白熱の炎が、まるで 生物のように、獲物を 焼きつくさんと、メラメラと 燃えているでは ないか。


78
蛇王とまさるの決死のジャンプは見事成功して、ブクちゃんののっている檻の上にとびのることが出来たが、しかし刻一刻と、檻は燃えさかるコーカスの炎にむかって落下していくではないか。
まさるは檻のさがっている鎖づたいに上へのぼりはじめた。しかし檻の落ちる速度は、まさるののぼる速度よりよほどはやい。果してまさるはのがれることができるだろうか。
79
蛇王さん、鉄棒で檻の屋根をやぶれないかしら。僕は檻をさげてある鎖づたいに上へのぼってみるよ。
うん、まさる君、いいところへきがついた。やってみようじゃないか。……
80


81
いっぽうG・M號の巨体は、マオー星の空を壓して魔城の一角に翼をやすめていた。黄金バットの命令があるまで、モーグリ博士、シマ女王、かず子等は、安全な氣密室でやすんでいた。おゝ!!しかし黄金バットは怪タンクの手中にあり、まさる、蛇王に危機せまる。地底國の偉人モーグリ博士は、果してこれを知ってか知らずか?
82
女王さま、黄金バットのおじさんは、いまごろ何をしていらっしゃるのでしょうね。まさるさんたちは、クーマ城で大丈夫でしょうか。
そうね。でも皆さん、お強い方ばかりだから、いまごろクーマ國の悪人たちをこらしめておいででしょう。
83
先生、黄金バットやまさるさんたちのようすは、どのようになっていますか。かず子さんがしきりに心配していますから……
女王、御心配あるな。神變不可思議な超人黄金バットがついていますゆえ、まちがいはありますまい。


84
おゝッ!!黄金バットから信號がいりましたぞ。テレビジョン装置用意!!女王、皆のよ、うすがわかりますぞ。
85
モーグリ博士よ!!まさる、蛇王は、クーマ宮の地下のコーカス爐の中になげこまれようとしている。ただちに救助にゆかれたし。されどコーカス爐は、クーマ國の善い人民にも必要なり。まさる、蛇王たちを救わば、コーカス爐は破壊すべからず……
我は、これより怪タンクに、捕われたような眞似をして、怪物「Q」にのりこまんとす。必らず心配は無用。博士の御健闘をいのる。
86
ごうごうと轟きわたるG・M號の機關の響。巨体をゆりうごかして、機首をさげたG・M號は、今まさにクーマ城の地下にむかわんとするのであった。


87
クーマ城内のクーマ人は、いずこに逃げたのか姿が見えぬ。奇怪な王宮の圓形建物は、G・M號の轟音とともにくずれ去っていく。テレビジョンに、映しだされるコーカス爐にむかって、G・M號は、ものすごい勢で突進していった。
88
脚部ひきこみ、用意。出發開始、クーマ城地下のコーカス爐にむかって前進、蛇王、まさるを救いだすべし。コーカス爐は小破壊の程度にとどめよ。
89
G・M號は、さっそうとクーマ城の地底にむかって突入を開始した。操縦室には、モーグリ博士の指揮のもとに、地底國の勇士、NO.7 NO.9 NO.28の面々が、いた。いそげG・M號よ。蛇王ブクちゃんの乗った檻はもはや炎すれすれの所までさがって來た。鎖にすがりついたまさるは、一生けんめいにのぼっていくが、鎖の落下速度は早い。蛇王の鐵棒もまだ檻をやぶれない。シャ女王やかず子たちは氣が氣でなかった。いそげG・M號!!いそげ!!


90
91
92
蛇王さん、がんばって下さいよ。僕もがんばってのぼります。
まさる君、おちないようにのぼるのだよ。早く早く、もう火の中へはいってしまいそうだ。
ブクちゃん。鉄棒で檻をやぶるから眼をまわさないようにしてくれよ。大丈夫かね。
白熱のコーカスの炎は、メラメラとブクちゃんの足もとに燃えさかっている。あつぃッ!! あつぃッ!! 泣き叫ぶブクちゃん。こん身の力をこめてふりおろす蛇王の鉄棒にも、檻はびくともしない。非常につよい特殊な合金で作られているらしかった。あせる蛇王の目の前にみるみるせまり来るコーカスの炎……。三人はいまや絶對絶命とみえた時、檻の壁がみしみしとゆれて曲ってきたのである。


93
ブクちゃんと蛇王が乗っている檻が、まさにコーカスの炎の真只中に落下しようとしたせつな、厚い爐の壁をつきやぶって突入してきたGM號は、ブクちゃんの檻の格子を飴のように曲げてしまった。
94
おーい、まさる君。もどって来たまえ。GM號がきてくれたぞ。もう大丈夫だから のぼらなくてもいいぞ。
95
さあ、ブクちゃん、はやくG・M號へ乗りうつるのだ。ぐずぐずしていると大火傷をしてしまうぞ。蛇王さんも はやくひきあげて下さい。
おゝ!!なつかしのNO7よ。よくこそ たすけて下さった。サンキュー、サンキュー、ベリマッチ。


96
一心ふらんに のぼって いく まさるの耳には 蛇王の 声は きこえなかった。すこしでも 早く 艦の落下を くいとめようと、血の ながれる 手で 鎖に すがりつき、ようやく 壁の出口まで たどりつくことが 出来た。
97
あッ!! クーマの娘め、あんなところに いるな。よーし。
98
あーら、あの人間の子供は まだ焼けないで のこのこと あがって 来たわ。くやしいーッ!!
99
やいッ!! クーマの 娘め、よくも僕たちを ひどい めに あわせたな。こうして やるぞッ!!
あらッ! やったわね!! 目から火が、出たわ。よし こんどは、お前の目から火をだして やるわ。


100
こら、コマ、コーカス爐の火を消せ。
じょうだんじゃないわ。あれを消したら クーマ國は 全滅してしまうのよ。
102
あっ! こいつの 角は、吸いついたら離れないぞ。
101
よくも わたしを ぶったわね。まうし こんどは あたしの奥の手を だして ひどいめ、にあわせてやるよ。
まわる まわる、春は三月落花のまいと ござーい。どうだ、人間の子供、少しは まいったかい。
103
クーマ大王の娘、コマの二本の角は、ニュル ニュルと 伸びて、まさるの身体に 吸いついて しまった。コマは 得たりやおうと ばかりに、吸いついた まさるの身体を 風車のように ふりまわしはじめた。


104
ケッ、ケッ、ケッ。人間の子供なんて たよりないものだね ちょっと 振まわしただけで 氣をうしなって しまったよ。お母さんの所へつれていってやろう。
105
お母さん、あたしに てむかった 人間の子供を つかまえて きたわよ。
クーマ宮殿、地階の出入口にはガマ女王やお旅たちが、ユーラりにのって、コーマの 来るのを待って いた。
106
お母さん、この子だけが、コーカス罐から はいあがって来たのよ。あたしがふりまわして やっつけて やったの。
まあ、えらかったわね。そいつは、きさると いう奴だよ。ターマ大王様の所へ つれていきましょう。


107
女王様、かず子さん、僕は救けられたけれど、まさるさんが、上へのぼったきり降りてこないのです。どうしますか。
先生、まさる君は再びクーマ人にさらわれたらしいですな。
108
クーマも、驚ろくべき科學力をもっている。一刻も猶豫はならぬ。すぐ救けにいこう。
109
ブクちゃんと、蛇王を機内にすくいいれたG・M號は、まさるを救いだすべく、機首を上方にむけて活動を開始した。
ブクちゃんのとじこめられていた檻も、まさるがのぼっていった鎖も、今は、白熱のコークス爐の中で、どろどろにとけていた。高熱の爐の中をG・M號は、强行突破した。
110


111
112
G・M号は前に噴火山内を突破した高性能を持って、コーカス爐一二、〇〇〇度の高熱の中を上昇して、クーマ城、地階の機械室に突入した。
113
やはりまさるさんはいないぞ。あッ、ユーラリがとびだそうとしている。先生、早くあれを捕まえて下さい。


114
上空にまいあがったユーラッのあとを追って、G・M號もつづいて その巨体を空にうかべた。コマに、捕まったまきさるを奪いかえすべく必死の追跡がはじまった。
115
先生、ユーラッもなかなか早いですな。追いつけますか。破壊光線を発射してはいかがですか。
うん、なかなか早いわい。破壊光線を使うと まきさる君の命が危険だ。
116
空中桟橋をかけわたすから、君ごくろうでもユーラッにのりこんで、まきる君を奪いかえしてきてくれぬか。
そいつはありがたい。腕がむずむずするぞ。ゆかい千萬ですわい。


117
118
おゝ!! 見よ!! クーデ城上空に、サッと羽ばたいたG・M號から、のびちぢみ自由自在の空中棧橋が ユーラリめがけて發射された。 するすると 音波のような早さで 伸びたその先端は、ユーラリのせなかに ぴったりと 吸い着いた。
お熊襲め!! お光め!! こんどこそは 逃がさぬぞ。 まさる君 今いくから、氣持をたしかに持っていろよ。
119


120
蛇王さん、用事がすんだらすぐ合図して下さいよ。すぐ桟橋を引っこめますから落ちないようにね。
121
122
蛇王さん、しっかり、しっかり。モモンガーお熊になんか負けちゃ駄目だよ。はやくまさるさんをたすけて……。
クーマ都市、ヌラクラ三千米の高度にG・M號はユーラツを釘づけにしてしまった。この時、颯爽とG・M號から躍り出た蛇王は、百八十貫の鐵棒を水車のように振りまわしながら、空中桟橋をまっしぐらにかけていった。


123
ガタガタおしでないよ。こんなものにおどかされてたまるものか。今ふり飛ばしてやるからね。いよいよだめ、、ならいよいよ親船に助けてもらうから心配おしでないよ。
124
あらまあ、あらまあ、大變、大變、ユーラリが動かなくなってしまったわいな。墜落してしまうじゃないか。南無阿彌陀佛、死んでも命があるように。神様、アーメン。
125
ユーラリがいくらもがいても、だめだった。G・M號の棧橋はその強い吸着力で、ユーラリの背中に吸いついて、はなれればこそ。おゝ、蛇王はまさるを救うべく、橋上を一散にユーラリ目がけてかけおりていく。


126
やい、お熊ッ!! まさる君を返えせっ。返えさぬとたゝきつぶすぞ。やい、蛸の化物。降参せぬかッ!!
おゝ、颯爽たる蛇王の勇姿。クーマ都市上空三千米で、ユーヌリの背に打ちのった蛇王は、大鐵棒を眼よりも高くふりかぶった。
127
あれーッ、まあー、あきれたよっ。蛇王の奴め、又のこのこ出て来たよ。にくらしい。
あの山男はまだ生きていたのだね。畜生、ひどいめにあわせてやるよ。
おくま婆さん、助けてよー!! あんなにガンガン叩かれては頭がいたいわよー。



128
地球人もチョイと しゃれた まねをするわね。でも スイッチをひねれば ユーラリの外側が熱くなって とても そこには 立って いられまいよ。
129
ほくそ笑みながらクーマ夫人ガマの手が そのスイッチに のびた。丁度その時、騒々しい今のさわぎで 氣を失なっていた まさるが パッチリ眼を開いた。「おゝ、蛇王さんが 助けに来てくれたのか。ありがたい。しかし、そのスイッチをひねられて たまるものか。」
あれッ、いけない。まさるまで 氣がついたよ。お光さん、早く つかまえなくちゃ だめだよ。
130
ヒラリとおき上ったまさるは、やにわにガマ女王の手を つかまえて しまった。そして、「クーマめっ!! 餘計なことを しないで窓を開ろ。早くしないと この手を ねじ切って しまうぞ。」と叫んだ。
131
あ……、あ、あっ、いたいっあ、いたいっ、コマ子、しかたがないから 天窓を あけな。


132
おゝ、いたいっ。そんなに つかまれては どうにもならないよ。すぐ 窓をあけるから はなして おくれ。
クーマの娘っ!! 早く窓を あけろ。ぐずぐずしていると ほんとに ての手を ねじきって しまうぞ。
今、あけるわよ。くやしいけれど お母さんが かわいそうだわ。
133
おっ、窓が あいた。蛇王さん、どうも ありがとう。今 上っていきます。
134
おゝ、まさる君、ぶじだったか。よかったなあ。ずいぶん心配したぞ。さあ、すぐG・M號へ引返そう。お龍やお光の奴等は いまいましいが 助けてやれ。黄金バットの方が 今度は心配なのだ。


135
さあ、Q・M號が待っているから急ごうぜ。あの化物共が又何を企むかわからないぜ。
136
脱出に成功したようだ。棧橋を引上げよう。
蛇王さん、あぶないところだったね。僕はもう少しで剝製にされるところでした。
137
えゝ、ほんとうにしゃくにさわるわ。「Q」へはダイヤルの八百番で通じたかしら。
コマ子や、せっかくのえものを取戻されて、ほんとにくやしいわね。すぐお父さんの所へ知らせて又取戻してやろうよ。


138
まさると蛇王は首尾よく ユーラリから 逃れたが、果して無事にG・M號に かえりつく ことが 出来たであろうか？
139
また——モーグリ博士が心配している 黄金バットは どうなっているのだろうか。兇悪な怪タンクの 巨大な爪に はさまれた黄金バットの その後の運命から たどってみよう。
140
黄金バットめ、愈々今度は 年貢の おさめ時だぞよ。ヘッヘッヘッ、ざまあみろ!!


141
巨大な爪に はさまれた黄金バットは、さすがに なす術もないのか、大きくあいた怪タンクの口の中へ のみこまれていく。
怪タンクの口に のみこまれた黄金バットの身体は もんどりうって 暗黒のじょうごの中に 吸いこまれていった。そして そのとたんに 底の方から くり出された 大きな 鐵の鎖は、みるみるうちに、黄金バットの身体を がんじがらめに しばりあげて しまった。
142
黄金バットよ、クーマ國の科學工場で 修繕した怪タンクの性能には おどろいたか。まあ しばらく その中で、がまんしているがよいね。
ウワッ ハッ ハッ、ウワッ ハッ ハッ、片腹いたいことをいうな。ドブロクスキーよ、黄金バットは まだまだ 貴様達には 屈せぬぞ。さあ 如何ようとも いたせ。
143

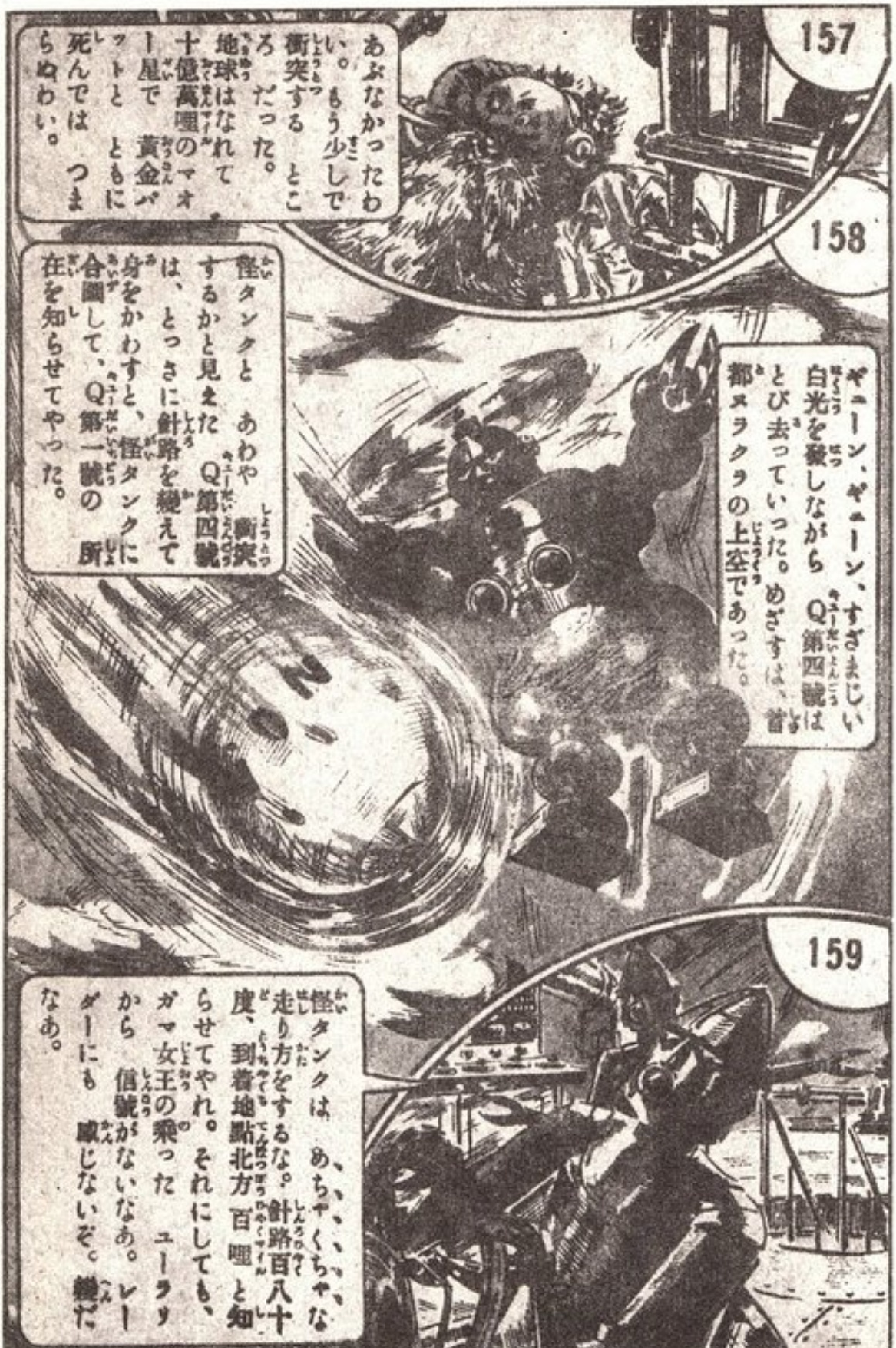

144
ヘッヘッ、愉快、愉快。難物黄金バットを とりこにするなんてなんてまがいゝんでしょ。どれ、ナゾー殿に 早く 知らせようかね。
145
はーてな？ うちの 親分は どうかしたかな。いくら呼んでも 返事が ないわい。せっかくバットを つかまえたのに。
146
黄金バットを 腹中に納めて 怪タンクは 意氣揚々と、ゴロンゴロンと音もいと高く、はるか北方に そびえるナンダ・カンダの 高峰をめざして とびたった。ナゾーが吸いこまれたQ第一號の後を 追うのである。


147
いっぽう、クーマ大王とナゾーを乗せたQ第一號は、はるか彼方にうかぶ母船めざして猛スピードでとんでいく。二號、三號も後を追う。第四號は、ガマ女王やお館の乗ったユーラリを求めて、再びクーマ國のヌラクラへひきかえした。
148
ヌラクラ上空をとぶ怪タンクは、空の交通路を知らなかった。フル・スピードでヌラクラめがけて降下して来るQ第四號の直前に、突進して来るではないか。
149
あッ、あぶないッ!!
よけろ、よけろッ!!
Q第四號の操縦士が、あわてて針路を變えようとしたとき……


150
Q第一號は、クーマ大王とナゾーを乗せて、脚部をひつこめて悠々と、マオー星北部の山嶽地帯の上空に待つ、母船めざして とんでいくので あつた。
151
ナゾー殿、Q人を御紹介いたそう。Q族は、マオー星に一番近いQ王星に住んでいられるが、かねて吾らとは隣國のよしみを結んでいるもの。このたびの異變にさいし、救いの手をのべて下されたのじや。貴殿からも、よく御禮を申されよ。ここに いられるのは Q六司令にQ八副司令殿じや。
それはそれは ありがたきことで ござった。われは、地球の惡世界に君臨する ナゾーと申すもの、よろしく おねがい いたします。
いやなに、お禮では いたみいる。クーマ國とは、かねて事あらば 救けあうとの約束ゆえ、これしきのことは なんでもござらん。何事でも遠慮なく 申し出られよとのQ王樣のお言傳でござった。いずれ 母船にて お眼に かかれましょうぞ。
ナゾー殿、そのかぶりものでは、御不便でござろう。Q國のよき藥をさしあげよう。
Q第一號では、珍客ナゾーと クーマ大王を迎えてQ六司令とQ八副司令が會談をしていた。Q王星に住むQ人とは、果して如何なる人種であろうか。そして又、それは如何なる考えを 持っている者だろうか。善か、はた また惡か？


152
では、そのクーキ丸を遠慮なく　いただくと　いたそうかい。
いや、有難きお言葉で　感謝にたえもうさぬ次第。Q王殿の御助力をいただけるなら、百萬の味方を得たも同様でござる。御言葉に甘えるようじゃが　さきほどの黄金バット一味の襲撃でクーマ國も　だいぶ　いたんでおるから、その復讐に何分のお力を借りたい。
それに黄金バット、いなる奇怪な　しろ、ものは　ひととおりや　二とおりのことでは　退治出来るような、なまやさしい相手ではござらぬ。さすがの　ナゾー殿も余も　手をやいているところじゃ。充二分の　御後援をおたのみ申すぞ。
153
はて、クーマ殿にも似合わぬ　弱氣なことを申されるものかな。キ、キ、キ、キ……。黄金バットは、われらのQ王様も、よく研究しておられるゆえ、いずれ　對抗策も充二分に持っておられる筈。まず　まず御心配めされるな。さしあたり、クーマ國の復讐と、彼等を　ほうりこむ一大牢獄を　つくらねば　なりますまい。ナゾー殿、Q國特製のクーキ丸を　おのみなされ。すれば　そのかぶりものは不用じゃ。
ナゾー殿、かぶりものをおぬぎなされ。この　藥なら　いくらでも　あげますよ。丸藥でも　水藥でも……。
おかげで　身心ともに　爽快になり、生きかえったようですわい。われらの部下にも皆この藥を與えたいが、多量に　いただくわけには　まいらぬかな。


154
おゝ!! ぞうか。それは よかった。どれどれ、怪タンクに早く来るよう返電しておけ。針路百九十度…
Q六司令殿、怪タンクから入電がございました。ごらん下さい。
155
おゝ、これは、すばらしい。怪タンクが黄金バットを捕まえたらしいぞ。目下Q一號を追って北上中とのこと。ナゾー殿、ドブロクスキー博士はなかなか腕ですな。黄金バットの奴の顔を早くみたいものじゃ。
わーッ!! それは凄いぞ。ドブロクスキーは大手柄じゃ。黄金バットさえ捕まえておけば安心じゃ。あとの山男や女子供をひねりつぶすのはわけのない ことじゃわい。
156
黄金バットは、われらのクーマ城を破壊した憎むべき奴、捕まえてきたら、八つ裂きにしてくれようぞ。はて 待ちどおしい ことよのう。
しかし、神技をほこっているとか申す黄金バットも、弱いやつでは ござらぬか。


157
あぶなかったわい。もう少しで衝突するところだった。地球はなれて十億萬哩のマオ1星で黄金バットと ともに死んでは つまらぬわい。
158
ギューン、ギューン、すざまじい白光を發しながら Q第四號は とび去っていった。めざすは、首都ヌラクラの上空であった。
怪タンクと あわや衝突するかと見えた Q第四號は、とっさに針路を變えて身をかわすと、怪タンクに合圖して、Q第一號の所在を知らせてやった。
159
怪タンクは めちゃくちゃな走り方をするな。針路百八十度、到着地點北方百哩と知らせてやれ。それにしても、ガマ女王の乘った ユーラリから 信號がないなあ。レーダーにも 感じないぞ。變だなあ。


160
ナンダカンダ山嶽上空に浮ぶ母船QQ號に向かってとぶ、Q第一號に怪タンクは追いついた。ドブロクスキー博士は、Q第一號に向けて「われ、黄金バットを生け捕りにす。如何に處置すべきや。」と無電を　うった。
「御成功を祝す、黄金バットは、Q第一號にあずかるべし。第五の圓窓前に近ずかれたし。」とQ第一號より返電があった。
161
やれやれ、やっと追いついたわい。Qはなかなか早いな。ナゾー様に早く黄金バットの泣っ面をみせたいものだ。バットは危險人物だから、じようごとさしだしてやろう。
162
怪タンク殿到着。スイコム用意ねがいたし。第五圓窓使用ー。


163
ドブロクスキー博士はさも心地よげに、「黄金バットよ、愈々さよならじゃ。Q王様の前で、はだかおどりでもごらんにいれるとよいわい。どれ、こんどはシマ女王とまさるの番だ。」とあざ笑った。しかし、黄金バットは来るべき運命を知ってか知らずにか、平然としているのだった。
Q第一號の第五圓窓内にはスイコム機とクレーンが直ちに据えつけられた。捕虜黄金バットを受取るためである。まもなく得意滿面たる怪タンクが圓窓の前に到着した。
164
黄金バットの入った鐵製のじょうごは怪タンクの爪にはさまれてQ第一號の第五圓窓にはこびこまれた。その有様にQ人たちはキ、、、と奇妙な喜び聲をあげた。
165
よし、スイコムは使用中止。Q八副司令、バットの箱を余の居室にはこんでおけ。
怪タンクに、しばし本艇の外側に止まっているよう指令せよ。


166
黄金バットは本艇においてたしかに受取った。ドブロクスキー殿、貴殿のこの働きはまさに殊勲第一等であった。ついで、御苦労ながらクーマ宮復舊工事、及び一大牢獄建設作業に従事願いたい故、首都ヌラクラに引返えし、準備せられたしと、ナゾー殿からの仰せでござる。
167
やれやれ、今度は土木事業か。ドブロク先生、なかなかはんじょうだなあ。骨休みもできんわい。
168
やがて喜びの色あふれたQ六司令、クーマ大王ナゾー等は黄金バットの處置を協議すべく居室にもどって來た。
クーマ大王殿得体の知れぬ曲者故、念には念を入れて、調べてみようではござらぬか。
これで何事も萬事安心というもの。これからはコーカスでもなんでも自由に手に入れられるわい。
169
や、や、や……これはどうしたこと。黄金バットはいないぞ!!
大變でございます。只今、Q第四號から至急入電がありまして、一大强敵G・M號のためにユーラリ、及びQ第四號は危険にひんしている由であります。
170
なにっ、G・M號の出現とな? よろしい、この旨本船に連絡して應援を頼み、又、Q全艇に出動するよう司令すべし。黄金バット逃亡の由も、本船に知らせておけ。


171
ウァッ ハッハッ、馬鹿者めら!! 余の代りにQ八副司令をいれて おいた。ゆっくり ながめるがいい。正義の味方黄金バットは 宇宙にある悪者 すべてをほろぼし つくすのじゃ。Q人よ。すみやかに悔い改めよ!!
172
スイコムを用意して、バットを逮捕せよ。Q空艇を出動させよ。
SOS
SOS
SOS
SOS
SOS
173
Q六司令殿、ユーラリをなんとか助けて下さらんか。妻と娘がのっているのじゃ。わしは心配じゃ。
あッ!! 黄金バットが 空中に とびだしたぞ。
174
Q六司令の命令一下、Q空艇は、ガマ女王のユーラリ救助と、黄金バット逮捕のために、一斉に出動を開始した。おゝ!! ナンダ・カンダ山上の母船QQ号も猛スピードで前進をはじめた。


175
やがて、Q連隊は二手に分列した。一隊は黄金バット攻撃、一隊はユーラリ救援にむこうためであった。
176
くるかっ、Q隊の者共!! 汝等、黄金バットの正義の怒りの前に忽ち朝霜の如く消え失せん。いざ、エーア・ソーラスよ、出て來たれ。汝の出るべき時が來たぞ。
177
おゝ、黄金バットの叫びに應じて、エーアソーラスは、ナンダ・カンダ山嶽の背後から その勇姿をあらわした。鋭どい眼でQたちをにらみながら、矢のように黄金バットの側へ天馳けて來た。
「エーア・ソーラス、光線第二号を發射せよ。」バットの凜々たる声が空中になりひゞいた瞬間、ソーラスの口から赤色光線が稲妻の如くひらめき出た。
「ウオーアッ、ウオーアッ!!」天地をこだまするソーラスの声。


178
「行け、空の王者、エーア・ソーラス。行きて 邪悪な者 共を亡ぼせ!!」
黄金バットの声が凛然と空にこだます。ソーラスの第二光線は群りよせるQ連隊めがけて、矢次早やに ひらめいた。


179
見る見るうちにQの光った表面は、そのかゞやきを失ない、だらだらととけはじめた。エーア・ソーラスの前には宇宙の怪彗星Qの發する線外線も、もはや何の効果もないのだ。レーダーの役目をもつ三本の突出した足も、その機能を失なってしまったのだ。
180
Q艇内は啞鼻叫喚の焦熱地獄と化してしまった。「ウワーッ、たすけてくれーっ!!」エーア・ソーラスの放つ熱線にあてられた艇内の温度は、三百度に たっした。乗員はわめき、身もだえして くるしみの声を あげるのだった。
くるしみにもだえる乗員を見て、Q六司令は身ぶるいした。「残念ながら、わが線外線はソーラスの熱光線にかなわない。ひとまず本船にひきあげて、再起をはかろう。こちらがこの調子ではユーラリ救援におもむいたQ八副司令、クーマ大王、ナゾー殿等の身もあぶない。すぐ引返えすよう打電しよう。
181
舵も、もはややきかない、残念だっ。もう だめだ。
しまった。電信機もとけてしまって、なんの役にもたゝないぞ。


182
Q六司令等のQ連隊が、このような惨敗をしたとは知らぬ他の一隊は、Q八副司令を先頭に、クーマ大王、ナゾー等が乗組んで、ガマ女王やお熊等を救うべく、クーマ宮上空を目ざして猛速力で飛んでいった。しかし、そこに見たものは、G・M号のために、木の葉の如く、ふりまわされているユーラリと、Q第四号のあわれな姿であった。
えーい、残念無念!! 余のクーモさえ健在なら、女王にかゝる憂目は見せまいものを……。さても、にっくき黄金バットめっ!!
183
ギャオーッ、たすけてくれー!!
ギャーッ、たすけてくれーい!!
184


185
ナゾー殿、心配なさるな。なんのG・M号ごとき……、全機、線外線発射用意っ!!
186
NO.8
Q八副司令の命令下、Q連隊は隊列をかえて、G・M号包囲の陣型をとっていった。そしてQ全機の表面から輝やき出す線外線は、こうこうと目もくらむばかりであった。
Q連隊の包囲陣は、刻々ちじめられていく。線外線の輝きは一層増し、ユーラリとQ第四号のつかまえられている桟橋ノービルにむかって、一斉集中放射がはじまった。おゝ、たちまちクーマ宮上空に展開される、悽惨な大争闘!!
187
まさる君、蛇王君、桟橋を引っかけられないように、うまく操縦してくれたまえ。


188
よーし、桟橋切断!!
つぎ、スイコム発動用意!!
開始!!
ユーラリ乗組員を、直ちに救助せよ。
189
Q連隊の棘外線の集中攻撃に、さすがG・M号の空中桟橋ノーピルも真中からブッツリと切断されてしまった。あおりをくって、空中に回轉するユーラリ。
190
その時、間髪をいれず、突如G・M号のまわりに大旋風が巻おこった。全Q艇内の大スイコム機が回轉をはじめたのだ。
G・M号内にまきおこる大突風。室内の器物は、たちまち空に巻あげられておどり狂う。
大変だっ。モーグリ先生。すごい吸引力だ。ノーピルが切られてしまった。あっ、身体がひっぱられるようだっ。


191
192
Q連隊のいっせいスイコム機活動開始に、さすがの空の巨鯨G・M号の巨体は大波にもてあそばれる小舟のごとく、右に左にゆれうごき、あわれ操作の自由を失なおうとしている……。
「あゝっ、もうだめだっ!!」
193
黄金バットのおじさんが、助けに来てくれないかなあ。
まさる君、いけない。自力でがんばらなければだめだぞ。みなのものもしっかりがんばるのだよ。こうなれば最後の非常手段だ。Q連隊の包囲陣の中央を突破してクーマ宮地下へもぐりこもう。さあ、最大速力を出すから注意!!


194
G・M号は取巻くQ連隊の中央を猛速力で突破を開始した。モーグリ博士はこの大旋風をさけるべく、地下への避難を考えたのであった。がしかし、時すでにおそかった。
195
ややっ、G・M号は、氣が狂ったか？わざとこっちへ向って來るぞ。
地中へ逃げるつもりだな。そうはさせぬぞ。さあ、スイコム機を最大限に活動させよっ。
196
ゴウゴウとゞろくスイコムの活動音。グヮラグヮラピューッとくだけてまいあがるクーマ宮の殘骸。高架道路も、円形家屋もキリキリまいして吸いあげられていく。今や、天も地もたゞ猛烈な大旋風の中に巻こまれてしまったのであった。


197
あゝ、さしもがんこなG・M号もミシミシきしみ出して來た。そして、ついに上部外側の扉がすごい吸引力で引張られて パッと開いてしまった。まさると、そのそばにいたかず子とブクちゃんがアッというまもなく空中に吸あげられた。三人の身体は みるみる空高く まいあがっていく。
198
一方、きわどいところを救われたガマ夫人たちは、久しぶりにクーマ大王やナゾーと相会うことが出來て、大喜びだった。
お熊、お光、無事でよかった。さあ、このクーキ丸をのめ、元氣が出るぞ。
199
「ウフフ…、いい氣味だわい。お前たちはもう重勞働百年だよ」お熊達はまさる達を見て大氣焔をあげていた。
お熊とお光は、ナゾーからクーキ丸をもらって呑みマスクも不要になって元氣百倍……。


200
大空の彼方、急を聞いてかけつけたエーア・ソーラスが、みるみるうちに遠ざかりゆくQ第二分遣隊の後を追わんとしたが、時すでにおそし、あわれ、まさる等は　再びQ人の手におちて　しまったのであった。
凱歌をあげて引あげるQ連隊。目ざすは彼等の根據地ナンダ・カンダ山脈である。ソーラス如何に雄叫けべど、まさる等を捕えられてしまっては早やほどこす術はなかった。
201
ちょいと　副司令さん、こいつらを今度は　この碎殺機に　かけて　しまうのですかね。いい氣味ですね。
いや、Q大王閣下にもお見せしなければ處分出來ぬ。だが、たぶん今怪タンクが建設中のナンダ・カンダ山大牢獄に　入れることになるだろう。



かくして意氣揚々Q連隊が本據にひきあげている時……。

おゝ、突如、空の彼方にあたってとどろきわたる異様なる物音!! Q連隊がひきあげようとするナンダ・カンダ山嶽の上空に、尾を引いて飛ぶ白光一條!! そは何ものぞ!!時しも

「ウハッハッハッハッ」。

刮然と天空にこだまして高笑する正義の味方黄金バットの声。「おゝ、無事に到着したか。待っていたぞ。邪惡なる相手はナゾー、クーマ、Qの三連合体、強力なれど、彼等は天にそむく背徳の輩、汝等恐るゝところなく破邪顯正の威力を發揮せよ!!」

と、その白光に向って餞する。

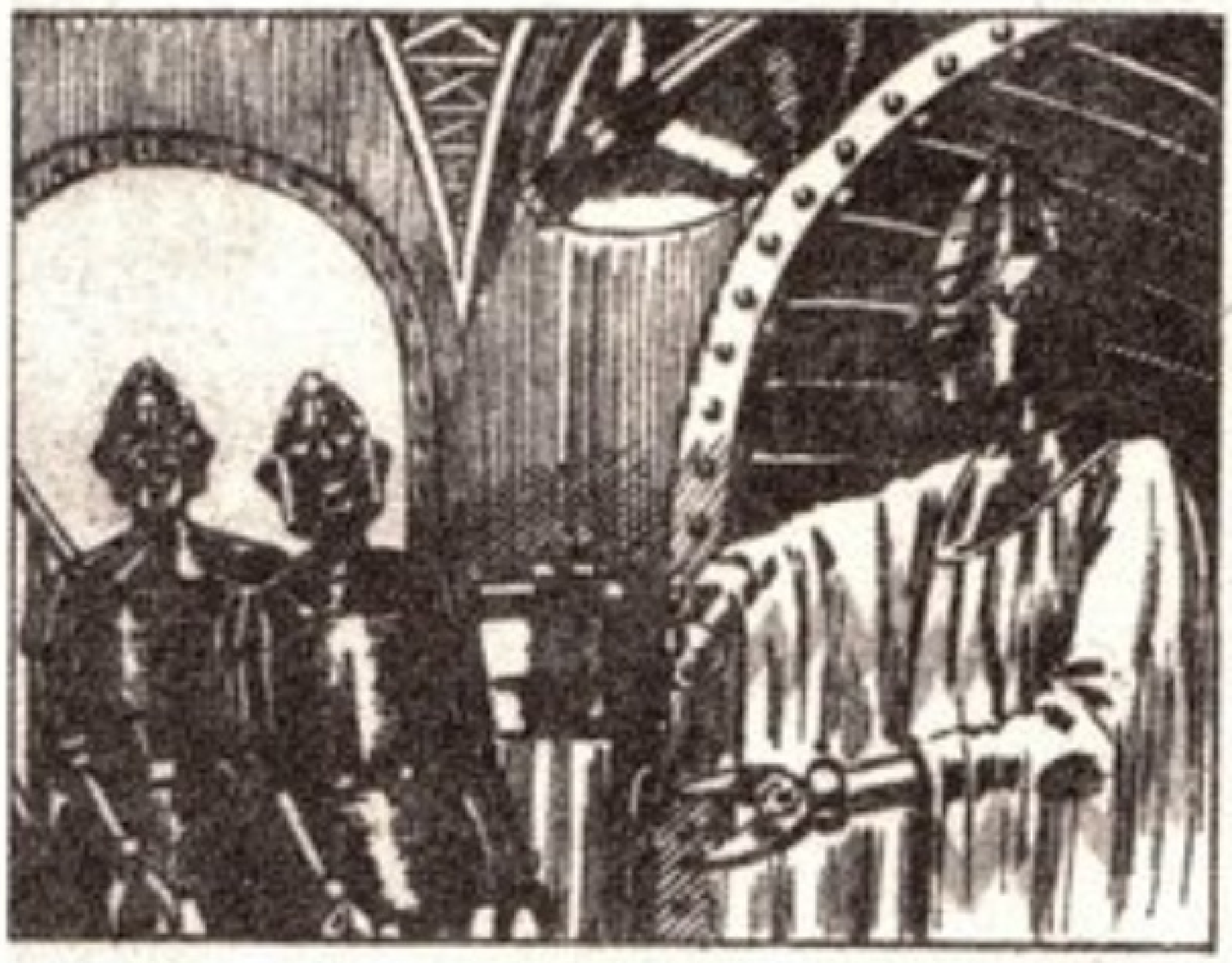
地球はなれて雲煙萬里、マオー星上、正邪善惡入り亂れて再びくりひろげられる大活劇を讀者よ、期して待たれよ!!


黄金バット
科學魔篇①
作画・永松健夫



① 惑星ロケット基地ではまさる、かず子、ブクちゃんがナゾーたちに捕まえられて終った。悪者どもの、Q遊隊は急遽Q大王のいるナンダ・カンダム山脈の上空の母艦QQ号へ引きあげていった。スイコム機で捕まえられた三人は、Q機内の牢獄にとじこめられていた。この時モモンガーのお婆は、「ひひ、ざまをみろ。お前たちは人間の標本になるのだよ。生きながらミイラにされるのだ。ゆっくりお念仏でも唱えて待っておいで。おお、いい気味だ」今まで、さんざんいじめられた復讐に、モモンガーお婆は腹をかかえて笑っていた。

まさる少年、かず子、ブクちゃんは、今までの苦心も水の泡となって、危機は刻一刻と迫って来た。然し、どうする事も出来ない。



② 今や、Q八號司令部では、Q八號司令が、ナゾーやクーマ大王と勝利の喜びにひたっていた。そしてQ八號司令が「われわれの偉大な科学力には、さすがの黄金バットも、肝をつぶした事でしょう。クーマ国の財力とQ星人の智力をあわせてぶつかったら、この大宇宙圏には、おそれるものは、まずないでしょうな」と、得意そうに話していた。クーマ大王、Q大王、ナゾー一味の悪者どもの王者たちは、正義の神黄金バットを馬鹿にして、驕りたかぶって椅子にふんぞりかえっていた。

この時、突如、警戒ブザーが鳴りひびいて、テレビジョンの映写幕に、何物とも知れぬ異様な怪物の影が走った。

おお！それは何物であろうか。

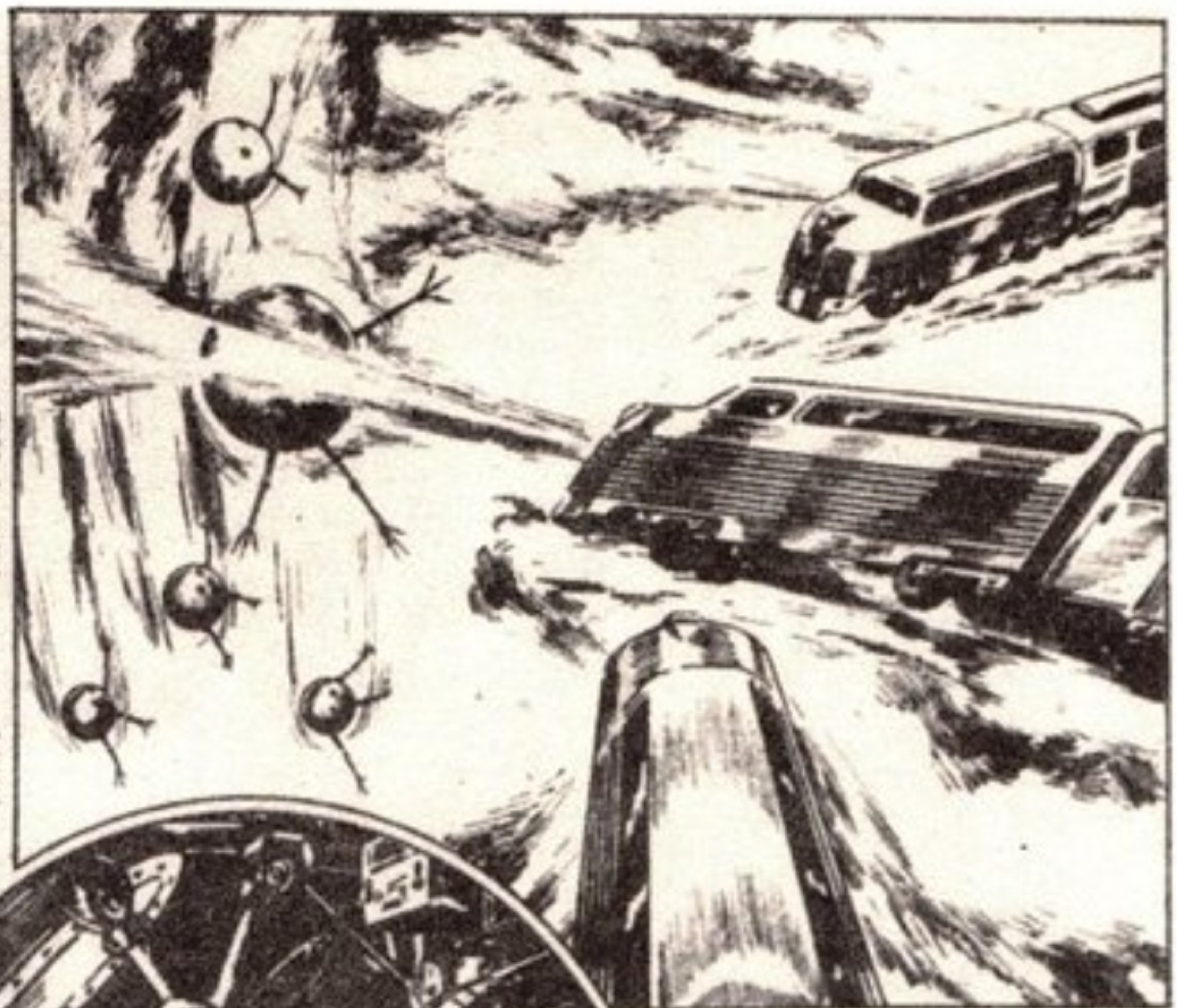


③ とたんに、ズズズウーンと激しい轟音と衝撃を感じてQ機の飛行がとまった。一同が顔色を変えて、はっとたちあがった時、乗組員の一人が駆けこんで来た。「Q八號司令殿！大変です。地球人の使用する汽車のようなものがわがQ機の前途をさえぎり、奇怪な攻撃を加えてまいりました。いかがいたしましょうか」彼はあわてふためいて報告した。「よしっ！怪力線を発射せよ。空中列車など、何ほどのことやある。ただちに粉砕して終え」傲然として一同を乗せたQ機は、新しい敵に備えて、怪力線を発射しながら進んでいった。悪魔の三首領たちは、又もや正義団の攻撃を受けて、不安と怒りに身をふるわせて叫ぶのであった。



④ 異様な空中列車の操縦室に頑張っているのは、まぎれもない大木探偵ではないか。かって地底国で重傷を負って、生死のほども気づかわれていた大木探偵その人である。今や、その傷も全快した大木探偵は、優秀な地底人を選りすぐって、シマ女王を救い出すべく、はるばる魔王星まで空中列車で乗りこんで来たのだ。

「宇宙の怪人のあの強豪の機体から、怪しい宇宙怪力線が放たれだしたぞ 早く列車の窓をしめ給え。」



⑤　大木探偵は落ちついて空中列車を運転しながら、地底人たちを指揮していた。「異空彈の係Z君、もう二、三発御見舞して見給え。多分、Q星人たちは、たまらなくなって窓をあけるだろう」。濃い紺色に澄んだ大宇宙に、猛烈な空中戦闘がはじめられた。サァッ、ザザーン、と空中列車から射ち出される異空彈の間をぬって、パアーッときらめくのは、Q艦から発射される怪力線である。然し、空中列車が射ちまくる異空彈の彈道によって造られるエアーポケットに突っこんだQ艦は、飛行を停止せられ、大海に浮かぶ藻の如く翻弄されはじめた。もちろん宇宙艦である怪力線の効果も、既にその威力を失ないはじめていた。はげしい衝撃にあおられてQ艦の固い窓が、パッとひらき、艦内の空気が一度に、真空状態にある大宇宙に奔流のように溢れ出した。



⑥　「うわっ！大変だっ！船体が外へ持ってゆかれそうだぞ」と、さすがのQ八副司令もわめきたてた。Q艦内は空中列車の攻撃を受けて大騒ぎであった。
「捕虜の三人の奴等を連れて来い。彼奴等を窓の前につるしておくのだ。そうすれば、攻撃も出来まい」狡猾にたけたQ八副司令が怒鳴った。まさる、かず子、ブタちゃんが、彼等の前へひっぱり出された。
「おいっ！通信係、Q遊撃隊の隊形を一列縦隊に変えるように命令せい」



⑦　牢室から引きずり出された、まさる少年とかず子、それにブタちゃんの三人は、円窓の前に無理矢理につるされて終った。外は真空状態の大宇宙である。ほうっておいたら、三人の命は、たちどころになくなって終うだろう。まことに風前の灯である。
空中列車の機関室から、これを眺めた大木探偵は愕然とした。
「おっ！あれはまさるじゃないか。かず子さんもブタちゃんもいる。これはいけないっ。砲撃中止だ」そして、それとひきかえに三人の引渡しを要求しよう。大木探偵は、直ちに異空彈の砲撃の中止を地底人に命じた。空中列車は、物凄いスピードでQ艦の遊撃隊の中へ突入していった。
鎖につるされて、物凄い圧力のために、まさる少年、かず子、ブタちゃん達は、眼の前が真暗になって終った。

⑧ Q八副司令のところへ通信係の一人がはいって来た。「副司令殿、空中妖帆から捕虜の三名を引き渡せと、いって来ておりますが、どう致しましょう」「馬鹿を言え。あれは大切な人質だ。Q大王さまの御命令がなければ、勝手に処置は出来んのだ。否と言ってやれ。そして又攻撃をして来るようなら三名の生命は、ただちにもらいうけると、つけ加えてやれ」Q八副司令から怒鳴りつけられて、交渉拒絶の通信が、空中妖帆へむかって送られた。空中妖帆とQ連隊との間には、しばし冷たい沈黙が続いた。休戦状態のまま、嵐の前の静けさが続いた。

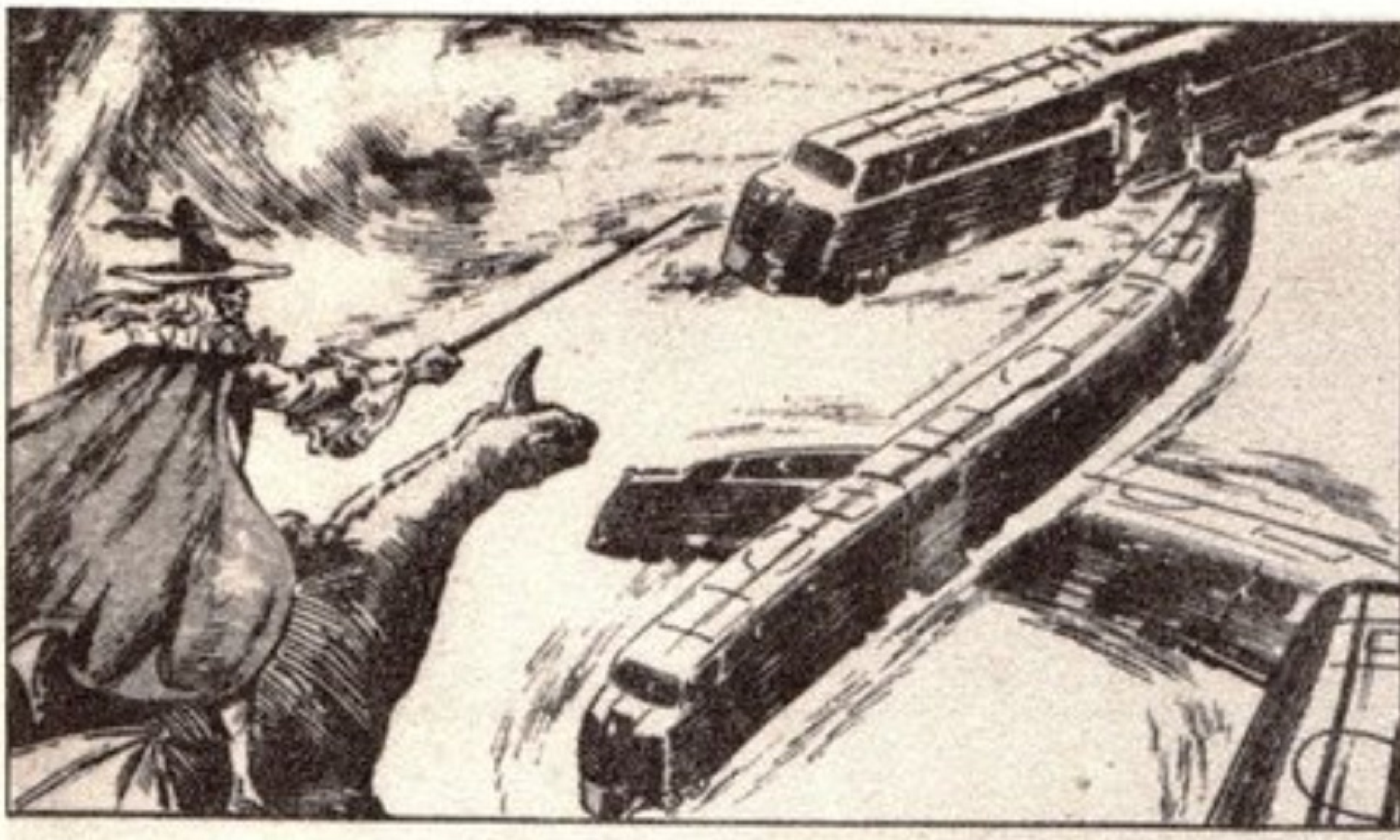




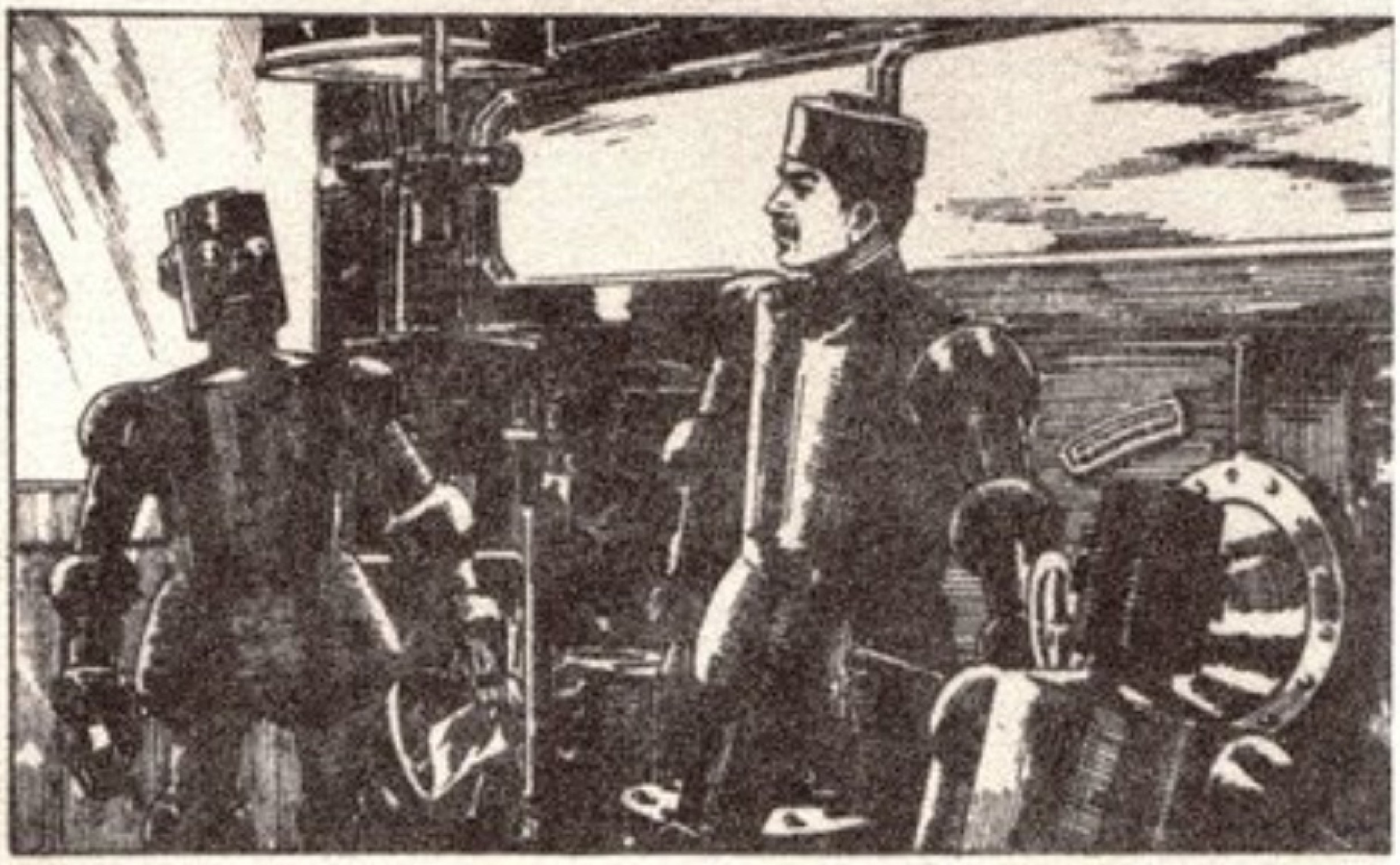
⑨ この時突如、バサーッ、バサーッと空をおおって、巨大なエーア・ソーラスの翼が、はばたいたかと思うと、その鋭い爪がQ八号の円窓にむかって伸びた。とたんにつるされた三人を翼の下にしっかりとかき抱いた。おおっ!!黄金バットが現れたのだ。正義の味方黄金バットは遂に悪魔の一味に対して起ったのだ。悪魔なる者はすべて震えあがる黄金バットの出現だ。



⑬ 「ウワッ、ハッハッハッ、Q星人よ。クーマ人よ。地球の人類は、大宇宙の邪悪なる何者をもおそれず最後の勝利にいたるまで闘うであろう。しかして、この闘いは諸君が持っている偉大な科学力を平和な宇宙建設の大目的のために、正義の味方のために、戦いとるであろう」大宇宙に響きわたる黄金バットの高らかな声。一瞬の間に、黄金バットは、まもる少年かず子、ブタちゃんを救い出してエーア・ソーラスの背にのせて、颯爽たるその勇姿を現わしたのであった。遂に黄金バットは正義の旗に立った。だが悪魔の一味は、黄金バットの姿をみて猛烈な闘争心を起した。エーア・ソーラスは、急速Q機のそばを離れ上った。



⑪ 忽如、エーア・ゾーラスに救い出された三人の正義の凱歌はあがった。すでに心配する何物もないと再び開始された空中列車の大攻撃。潜空艇の総攻撃がはじまったのだ。悪の一味は、今や、艦隊をくずして右に左に逃げまどい、空中列車に追い迫られていた。黄金バットの出現、凱歌は高らかに正義隊にあがったのであった。今や、悪魔団は、窮地に追いつめられて、どうする事も出来なくなって終ったのである。



⑫ はげしい攻撃の真最中、通信士の一人が大木探偵に急ぎの報告をもたらした。「黄金バットさまから、クーマ宮城地下に潜入したG・M号の危機を救援されたし、と通信が入りました。」

「よろしい、ではQ連隊の攻撃は一応中止しよう。その旨、空中列車の潜空艇手たちに連絡して呉れ給え」

さんを乱して敗走するQ八連隊をしりめに、空中列車は、陣容をととのえ、クーマ王宮めがけて、驀進を開始したのである。



⑬ クーマ王宮地下に一時避難したG・M号の内では、モーグリ博士をかこんで、地底国のシマ女王や蛇王たちが、まさる少年、かず子、ブクちゃん等を救いだす相談をしていた。この時、突如、異様な怪音が地上から伝わって来た。

「蛇王君、Q博が又、再び攻めてきたのかも知れない。G・M号のテレビジョンは既にスイコムのために破壊されて終った。蛇王君、御苦労でも君、ちょっと様子を見て来てくれまいか」

モーグリ博士は言った。

「よろしい、承知、O・K」喜んで引き受けた快傑蛇王は、鉄棒をひっかつぎG・M号からとび出して破壊された王宮の階段をかけ昇っていった。



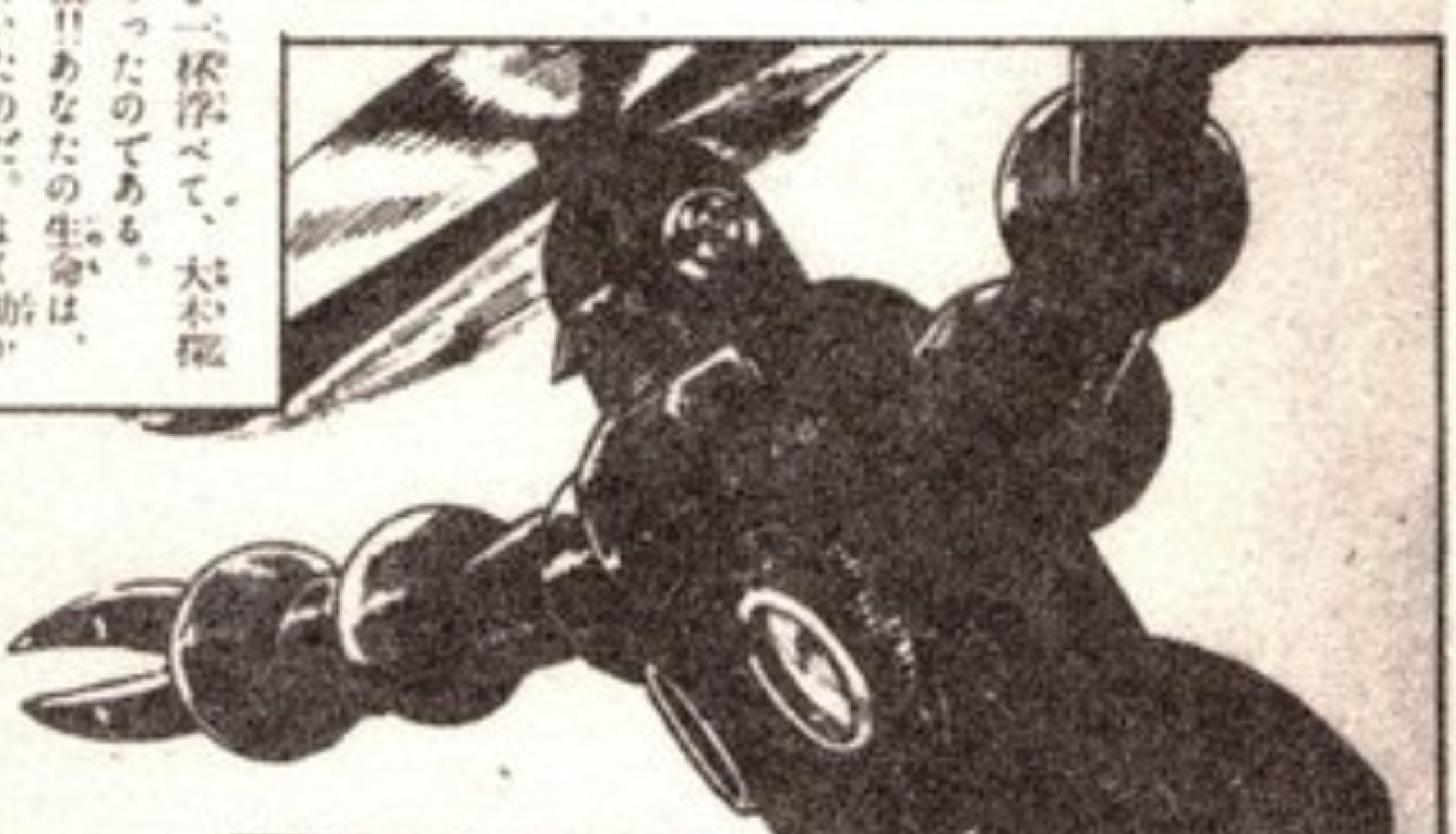


⑭ 破壊されつくしたターマ王宮に雄姿たる偉容を現わしたのは、おお！エーア・ソーラスを先頭とした空中列車の堂々たる一隊であった。空中列車は、もはや着陸の準備をはじめていた。

「おお、空中列車だ。地球人が科学の粋を集めて創作したに違いない。」G・M号を造ったモーダリ博士は驚喜の声をあげた。「エーア・ソーラスも一緒だ。うむ、有難いぞ。これで地球の科学の粋が一堂にあつまった。これで百万人力だぞ。」モーダリ博士と快傑蛇王は喜んだ。驚喜した蛇王は百六十貫の鉄棒を風車のように振り廻しながら歓呼の声をあげた。今や、地球人と地底人の科学の機械は一堂に集った。悪の世界は正義の世界に敵わないのであろうか。

⑮ 蛇王は、感激に嬉し涙を一杯浮べて、大木探偵とまさる、かず子と抱きあったのである。

「よく来てくれた。大木探偵!! あなたの生命は、もはやないものとあきらめていたのだ。よく助かって、全快して遠路はるばるこの遠い魔王星まで来てくれた。それにまさる君、かず子さん、ブクちゃんまで助け出して連れて本当に有難いぞ。黄金バットの超人的の偉大な力は、全く感歎のきわみだ。これから、全力をつくして宇宙の悪魔をほろぼすまで、力をかして下され。頼みますぞ。超人黄金バット殿、大木探偵！シマ女王もモーダリ博士も王宮の地下にいるから、早速ながら逢ってやって下され。ご案内致しましょう。」エーア・ソーラスや空中列車の乗組員、地底国人一同に、暫らくの休憩を命じて、黄金バットと大木探偵は、モーダリ博士に逢って今後悪魔どもを全滅するための相談をする為に、蛇王を先頭にターマ王宮の地下のG・M号にむかって、降りていった。





⑯ ターマ王宮の復旧をまかせられていた怪タンクが資材を運びながらこの有様に気がついた。「ややっ！あれはなんだ。空中列車がとまっている。敵手のエーア・ソーラスも、いるではないか。正義の一隊が一堂に集っている。これは大変、一大事!! 本隊に通知しなければならない。」ドブロクスキー博士は顔色を変えて怪タンクを動かしだした。

面白いこと日本一、冒険活劇日本一、活劇場面の連続。待望の冒険、「黄金バット第五巻・科学魔篇」永松先生が苦心、構想を練って漸やく完成された科学魔篇、愛読者諸君が待ちに待った黄金バット。新年号より続く新篇黄金バットは、かならずや読者諸君の人気の的となることうけあい。伝統に輝く黄金バットは益々面白くなります。二月号を御期待下さい。

黄金バット

作画・永松健夫

科學魔篇



前号までのあらすじ　悪の権化ナゾー一味は、天空の魔城のクーマ大王と隣国Q大王の助けを借りて、全世界を悪の世界にしようとしていた。それを阻んだ正義の味方黄金バットの戦いは続けられている。まさるとかず子を捕虜としてQQ母船にひきあげていくQ遊撃隊に大和探偵の指揮する地底国の空中列車が迫った。空中列車から射ち出す高空機のために、Q機は操縦することが出来なくなり、捕虜のまさるとかず子を丸窓につるした。この時、正義の神、黄金バットが乗っているエーア・ソーラスは、素早くまさるとかず子をとりかえして終った。そして、逃げまどうQ遊撃隊をあとにエーア・ソーラスと空中列車は、クーマ王宮の焼跡の地中に潜るG・M号の救援にむかった。が、然し、この有様をクーマ王宮再建工事に働いていた怪タンクに見つけられて終った。怪タンクは、ただちにこの事をQQ母船にいる悪ものども一味に傳えたのであった。



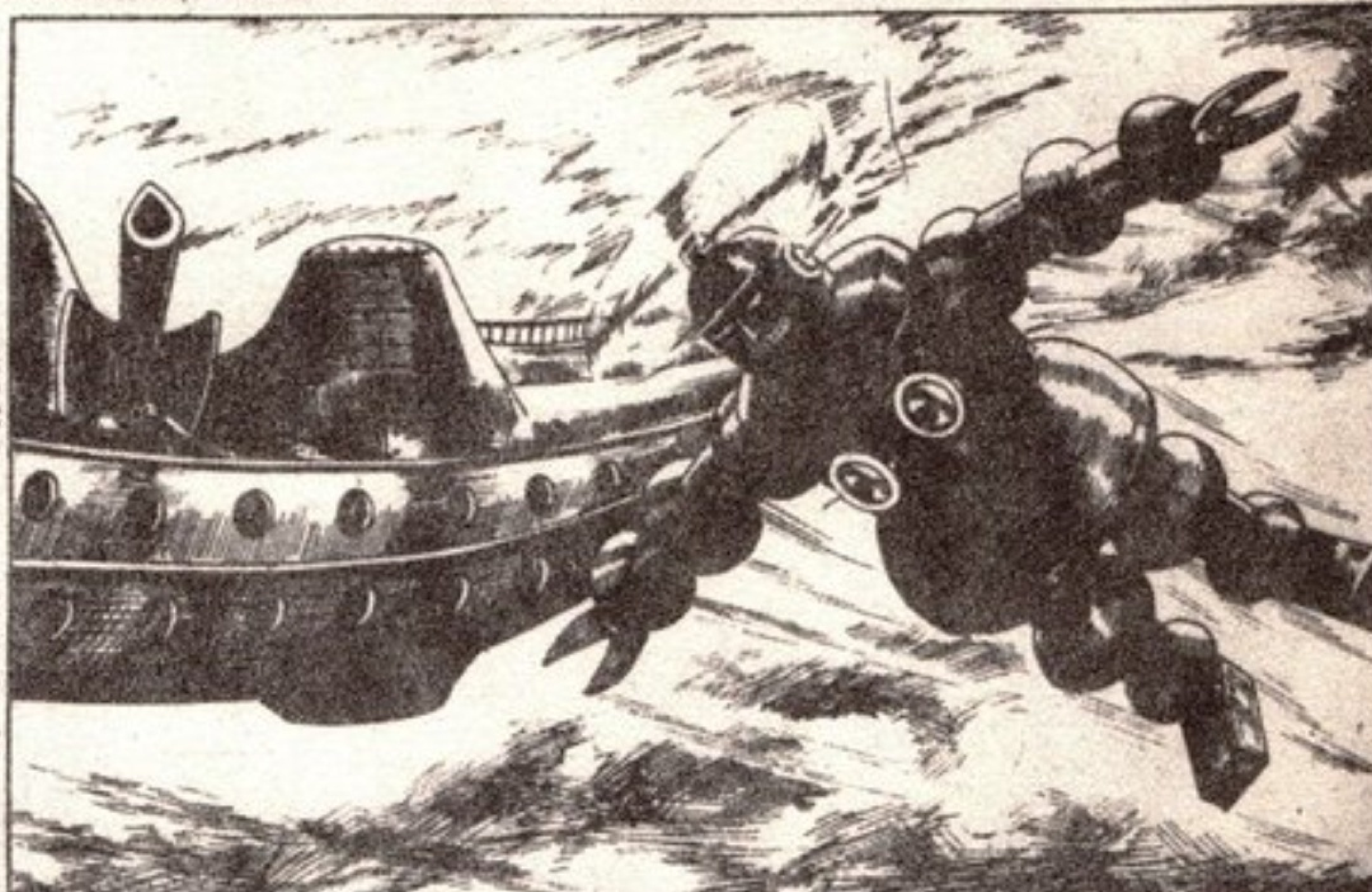
① 怪タンクの中のドブロクスキー博士は、王宮の跡の地上に休んでいるエーア・ソーラスと空中列車を見てびっくりした。「大変だ。わしの苦手のエーア・ソーラスが頑張っている。空中列車まで引ぱって来たと見えるわい。これは敵わない。ナゾーさまにお知らせして、なんとかやっつけて終わぬ事には一大事じゃ。王宮の再建工事も、うまくいかぬぞ。それっ！いそげ、いそげ」と、ばかりにナンダ・カンダム山脈の上空めがけて怪タンクを一目散に走らせた。



② Q機に乗っていたクーマ大王一族やナゾー一味は、ほうほうの態で母船QQ号内の長官室で、Q一司令官とクーマ大王、ナゾー一味との会議がはじまった。クーマ大王はQ一司令官にむかって「長官どの、危ないところを救けていただいて、まことに有難うございました。あつくお礼を申しあげますぞ。時に、ここに見えられたのは地球の王者でナゾーと言われるお方です。以後よろしくお願いしたいものですじゃ」と、あいさつした。Q一司令官は「いままでの事は、Q一号機からの通信で承知しております。かねてQ王殿下もお待ちかねですから、いずれお逢い願うようになりましょう。しかし、地球のナゾーどのとその部下の方方やクーマ人およびわがQ星人の三者が、ともに力をあわせれば、まずこの大宇宙に、おそれるものはないでしょうな」と、大喜びで答えた。悪者どもが母船QQ号に集まって、又もや悪い相談をはじめたのだ。モモンガーお嬢、ハルビンお光を従えたナゾーは、地底国をはじめ、地球をも暗黒の世界とするべく、悪者どもの加勢を頼んだのであった。

③ このとき、モモンガーお鶴が得たりとばかりにのり出して来て、「長官さま、とんでもない。あの黄金バットと言う髑髏の化物を退治して終わないうちは、めったに油断は出来ませんぞ。空も自由に飛ぶし、地にも潜ることの出来る、とんでもない代もので、さすがのナゾーさまもクーマ大王さまも、手をやいておられますのじゃ。」と、醜くい顔をゆがめて言った。Q星一司令官は、にんまりと狡そうに笑って「なんのなんの、Q星人の偉大な科学力をもってすれば地球の化物の一匹ぐらいかたづけるのはわけもないことじゃ。ご心配なされるな。」と、いとも頼もしそうに言ったのである。





④「エーア・ソーラスや空中列車が、クーマ王宮の跡に休んでおりますぞ。みなさん、早く出動して今のうちにやっつけて下さい。敵の油断をみすまして不意うちするのに絶好のチャンスですぞ。」と、怪タンクはQQ母船へむかって電信を打った。奇奇怪怪な姿をした怪タンクとQQ母船は、空中で行きあって共にクーマ宮殿へと向かっていく。



⑤ 空にうかぶ鉄の城郭のような異様な怪物QQ母船は、その無気味な機体を空中で一回転させると、クーマ王宮跡の方へ前進をはじめた。Q星人たちが、機内では、いそがしそうに戦闘のじゅんびをしているのが見えた。



⑥「推力あげーい」「トロヶ弾丸よーい」と、矢つぎばやに司令室にいる、Q一司令から、それぞれの部署に伝えられていった。おお！見よ。眼下に長長と横たわっている空中列車、翼をたたんで地上に伏しているエーア・ソーラスの姿が見えるではないか。今こそ、攻撃の絶好の機会である。ほのぼのと明け初めた東雲の空に、奇怪な姿をあらわした怪タンクとQQ母艦の、奇襲は見事に成功したように見えた。弾薬庫の扉は、次次にあけられていった。大きな口をあけた弾倉の中から、トロヶ弾丸が、いつでも落せるように用意されていた。QQ母艦にまたがって、得意そうに怪タンクが胸を張った。二機は、音をしのばせて王宮跡に降りていった。



⑦この時、はやくも、襲撃を知ったエーア・ソーラスは、さっと、一ふり二ふり大きく翼ばたいたかと思うと上空さして舞いあがった。QQ号では、エーア・ソーラスが感づいたとみるや、さっと、地上に横たわっている空中列車めがけてトロヶ弾丸を雨のように降りそそいだ。トロヶ弾丸は、鋼鉄をもとかす高熱を持った怖しいQ星人の武器であった。

⑧これを見るなり物凄い怒りに燃えたエーア・ソーラスは「ウォーアァ」と、一声高くほえたかと思うと巨大な口を開いて、トロヶ弾丸めがけて、赤色殺人光線を発射しだした。すると不思議、空中列車に雨と降りそそぐと見えたトロヶ弾丸は、たちまち空中でドロドロにとけて流れはじめたではないか。「うわっ！これは！」と驚くQQ母艦を尻目にかけて。



⑨　天地をふるわすエーア・ソーラスのほえ声は地中の奥深く、もぐっていたG・M号の中までひびいて来たのだった。「おお！あれは、まさしくエーア・ソーラスの声、地上に何か変った事が起ったと見えるぞ。」と、黄金バットが、すっくと立ちあがって叫んだ。大木探偵や蛇王、セーグリ博士もきっと空をにらんだ。



⑩　G・M号をとび出す黄金バットにつづいて、地表にかけのぼった大木探偵や蛇王、セーグリ博士、その頭の上はるかな天空では、今やソーラスとQQ怪船との間にすさまじい大決戦が展開されていた。大木探偵はこぶしをふるって「いよいよ、QQ怪船が攻めよせて来たか。あの中にはナゾーもクーマ大王も乗りこんでいるのに違いない。よしっ！一きょに射ちおとしてやるぞ。」と叫んだ。蛇王もそして地底国のセーグリ博士も、武者ぶるいをして空中戦を見まもっている。「空中列車、上昇用意！戦闘開始!!」りんりんとした大木探偵の命令が、各空中列車に伝えられていった。直ちに空中列車が動きはじめた。



⑪　「大木探偵よ、蛇王よ。さらば健闘されよ。しかれども、無益の殺生は吾等正義の士の本意ならず。邪悪なるものを、大宇宙よりすみやかにのぞき去らば、一時も早く地球に戻り、平和の鳩につくされるがよいぞ。」黄金バットは、後をG・M号とソーラスにまかせて、大空に咲く真赤な花のように、真紅のマントをひるがえし、天空の彼方遠く舞いのぼっていった。おお！正義閣の中に常に黄金バットあり、邪悪なるものを打ちこらす黄金バットは、空の彼方より決戦を見守っていた。



⑫ 黄金バットの話をきいた大木探偵は「セーグリ博士よ。あなたは、地底国の女王とかず子さんをお連れして地球に帰って下さい。わしは、蛇王とともにクーマ大王やナゾーを手ひどくこらしてやりましょう。科学にすぐれた地底人の技師も来ていますから、こわれたG・M号は、すぐ直してわしらが持って帰ります。空中列車には小型ロケットも積んでありますからまさかの時には役に立つでしょう。まさるもセーグリ博士と一緒に帰るがよい。」大木探偵は、着々と戦闘隊型をととのえて、QQ母船と怪タンクに決戦をする準備を怠らなかった。



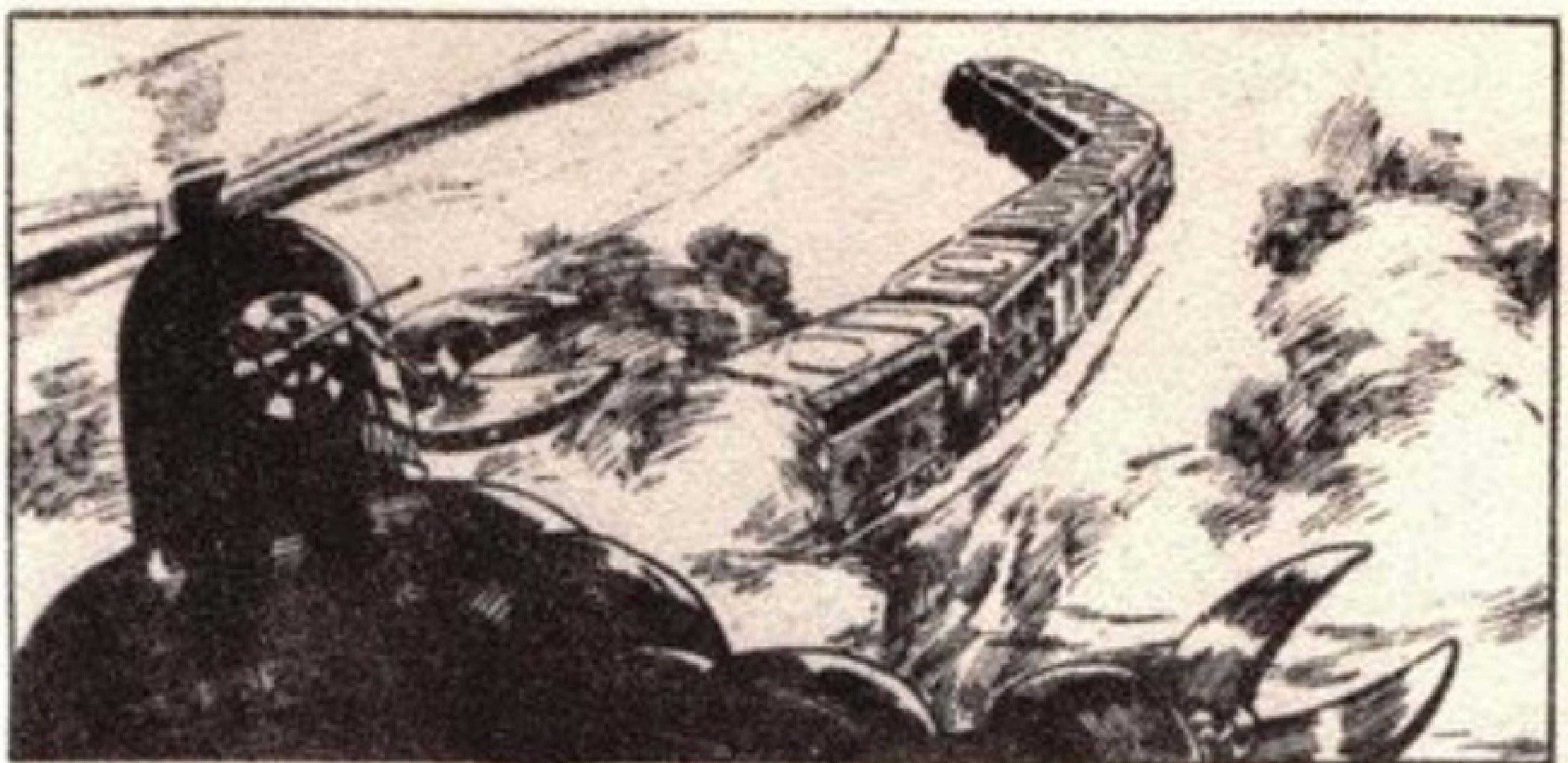
⑬ うなづくセーグリ博士にまさるとかず子と地底国の女王を託した大木探偵は、後顧の憂いをなくすると、蛇王とともに空中列車第一号に乗りこんだ。空中列車は、たちまち上空へと驀進していく。ゴゴーッ、グワーッ、ダーン、ズズダーン、たちまち大空に繰りひろげられる凄烈な死闘。QQ母船から射たれるジグザグ砲の間を縫って、パパーッとひらめくのは、エーアソーラスの赤色光線である。QQ母船とエーアソーラスがまじえる壮烈な激戦の真只中へ、大木探偵と蛇王を乗せた空中列車第一号は、まっしぐらに突入していった。





⑭「対空砲発射用意」車内にひびく号令一下、ドッパーン、母船よ、粉みじんに砕けんとばかりうちだす対空砲弾は、QQ号にむかって炸裂した。途端にQQ母船の周囲四方に千メートルの人工のエアーポケットがつくられたのであった。たちまちQQ母船は、大きく右に左にかたむいて、大動揺を来した。さあ！大変、乗っていた、Q司令、クーマ大王、ナゾー一味は、母船の中を転げまわって、文字どおり上を下への大さわぎであった。

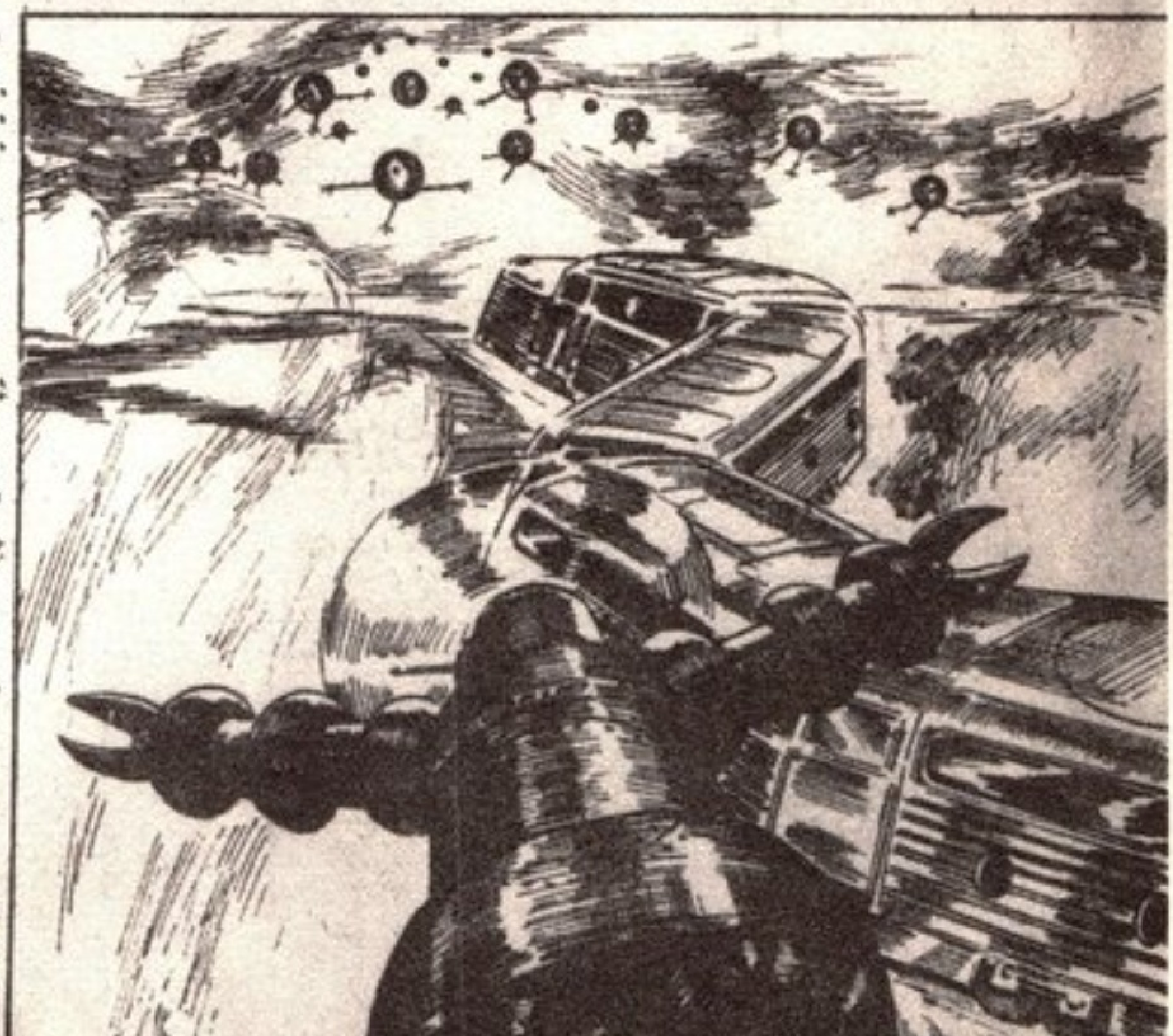
⑮一方シマ女王とまさるとかず子を乗せてセーグリ博士の指揮する空中列車第二号は、天空で起っている大激戦に心を曳かれつつも黄金バットと大木探偵の言葉を信頼して、きらめく星座の間を縫って、遙かなる地球へと帰途についたのであった。「ややっ！一台だけ、どこかへ逃げ出したぞ。それ追っかけるのだ」QQ母船のかげにかくれて、この様を見ていた怪タンクが、これを発見して、直ちに追跡をはじめた。





⑯「あっ！先生、怪タンクが追跡して来ましたよ」操縦席のセーグリ博士にまさるが驚いて声をかけた。「よろしい。もう少し、マオー星を離れてからおどかしてやろう。それまでおびきよせの戦術だ。ここまでおいて、甘酒進士と通信してやってごらん。ドブロクスキーの奴め！かんかんになって怒って側に来るに違いないよ」と、セーグリ博士がおちついた声で答えた。それとも知らずに、近づいて来る怪タンクの姿……。





⑰まさるたちが、みるみる近づいて来る怪タンクに気を取られている間に、空中列車第二号の正面に、突如雲間から姿をあらわしたのは、Q機の数連隊であった。たちまち、空中列車の進路をさえぎると見るや、大旋風が渦巻き起った。ゴォーッ、ゴォーッ、物凄い旋風、Q連隊は、エーア・ソーラスがいないのを、もっけの幸に、再びスイコム機の大活動をはじめたのである。味方が来たので勇気百倍した怪タンクは、頭をさげて空中列車第二号めがけて突進を開始した。

三月号へつづく

卑劣なる怪タンクは、多勢をたのんで、まさる、かず子、シマ女王の乗っている空中列車を粉微塵にしようと攻撃して来た。QQ母船対ソーラスと空中列車第一号の決戦はどうなるであろうか。大空に地底に縦横無尽に展開される「黄金バット・科学魔篇」三月号こそ、いよいよ面白くなります。手に汗を握って次号をお待ち下さい。

黄金バット

科學魔篇

永松健夫 作画



☆前号までのあらまし☆悪の権化ナゾー一味は、天空の魔城のクーマ大王と闇黒Q大王の助けを借りて、全世界を悪の世界にしようとした。これに対して正義の味方黄金バットと大和探偵、地底国のモーグリ博士が空中列車をひきいて、恐悪なる一味を打ちほろぼそうと敢然と起った。ナゾー一味を乗せた空の怪艦QQ号が、クーマ王女の帰り路に休んでいたエーア・ソーラスと空中列車に襲いかかり、トロケ弾丸を雨のように降り注いだ。これを知ったエーア・ソーラスは、直ぐさま大空に舞いあがり、赤色熱二光線で見事トロケ弾丸を防ぎとめて終った。地下のG・M号内にいた黄金バットは、ソーラスを追って空に飛び、大和探偵姫王を乗せた空中列車も又、大空の戦闘場をめざして突進していった。一方、シマ女王や、まさる、かず子を乗せて地球への帰途についた空中列車第二号は怪タンクの追跡をうけ、QQ連隊の包囲攻撃をうけて終った。



①「グヮーン、ズダーン」空中列車から射ちだす高空砲の一斉攻撃で、断層三千メートルのエアー・ポケットにおとしいれられたQQ母艦は、今や完全にその機能を失なって、キリキリと舞いながら落下していった。「きゃーっ」「大変っ！たすけでーっ」艦から落ちる機械の音にまじって、モセンガーお婆やクーマ女王の悲鳴が客室から聞えて来る。悪の一味を乗せたQQ母艦は、今や、阿鼻叫喚、まったく大混乱におちいって終ったのだ。みにくい巨体をのたうち廻らせて落下していくQQ母艦、ナゾーをはじめクーマ大王Q大王などは色を失なって慌てふためいていた。



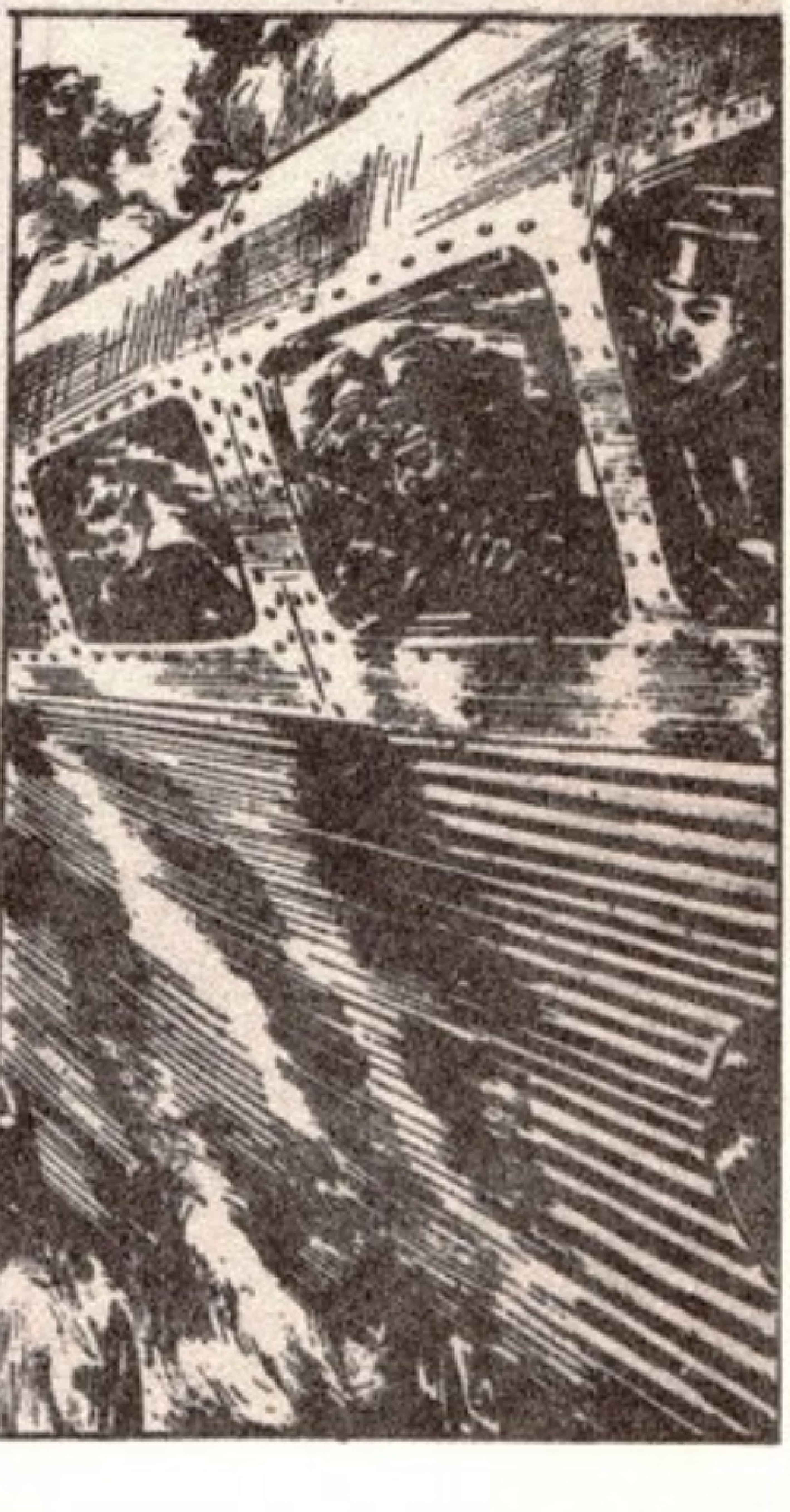
②「お母さん、こわいよ」と、クーマ女王の膝にすがりつくコマ子。お婆あは、必死になって「なむあみだぶつ、助け給え」と叫びつづけて、ハルピンお光の胸に縋りついた。QQ母艦は、今や垂直落下、天空の魔城より数万メートルの下方へまっしぐらに、墜落していくのだ。床に額をぶっつけ、転げまろびつ苦しみのたうつQQ母艦内の悪漢である。見よ、空中列車の高空砲の威力、QQ母艦は、文字通りキューキューの有様で、物凄いスピードで地球上めがけて墜落していくのであった。



③ ナゾーもクーマ大王も、部屋の片隅にほうり出され、机にぶっかり、壁に叩きつけられて「ギャオーッ、くく苦しいっ！救けてくれーい」と、今や絶望の声をふりしぼって、「キューキュー……Q」ーめっ、駄ぼらを吹きおって……だらしのない。こんなブリキ細工のような、こけおどしの玩具に怪我を負せおって……。どうするかみろ」と苦しい息の下から、うめくのであった。おお、星の一味の運命や……。



④ 落ちていくQQ母艦を眺めていた蛇王は「わっ、はっはっはっ」と腹をゆすって大笑いしながら大和探偵をふりかえった。「からきし意気地のない怪艦でしたなあ。この百八十貫の鉄棒でガンと一発お見舞いしたかったのに残念なことをいたしましたわい。QQ母艦の中じゃ、お歴々め、頭をかかえて泣きわめいていることだろうって、わっ、はっはっはっ」と豪傑笑いをした。「いや、いや、蛇王どの。安心するのは、まだ早い。あれだけの機能を備えたQQ母艦のことですから、どのような新手をもって立ち直って来るかも解らない。油断は大敵、各部署の隊員にも油断なきようお伝え下さい」



⑤ 今や、凱歌をあげた空中列車第一号は、烈風と雲を切って舞い降りていく。この時、遥か上空高く雲海を縫って、金色のうろこをきらめかすもの、これぞ、空中戦の勇敢者エーア・ソーラスであった。その背中に虹のマントをひるがえすは、正義の神自由の使徒黄金バットの英姿であった。「ソーラスよ、空中列車へ」と、黄金バットの命令一下、エーア・ソーラスは、うなじをさげて、空中列車第一号めがけて舞い降りて行った。



⑥ 空中列車第一号に近づいたエーア・ソーラスの背にすっくと立ちあがった蝙蝠バットは、「東方三百マイルの上空に、空中列車第二号は危機にひんす。毒で地獄に行かれよ」と、大空にこだまする声で警告を与えた。おお、鳥人蝙蝠バットが待っている蝙蝠城には、レーダーの基地でもあるのか、大木探偵の愛児まさる、蜂族国のシマ女王かず子が危難を受けつつあるのを神に祈るが如く、示すのであった。大木探偵と蜂王は、この言葉に「さては怪タンクの仕業だな」と叫んだ。



⑦ クーマ都市スクタラの東方三百マイルの上空に、Q連隊とスイーコムによって巻き起された大空戦は、すさまじい勢で空中列車第二号を襲撃しはじめた。闇を縫って空中列車から打ち出される高空砲弾の炸裂、そしてそこに生じたエーア・ポケットに落ちこむ幾つかのQ機、凄惨な空中の闘いが展開されていった。味方の出現に喜び勇んだ怪タンクは、ゴロロンゴロロンと満足そうなうなり声をあげながら空中列車第二号に隙あらば飛びかかろうと、身構えていた。ああ！凄まじい大空の激闘は続けられている。



⑧ 「窓と扉をしっかり閉めて、各列車の連絡をしっかり締めなおして、外から絶対に攻撃出来ないようにして呉れ給え」と、運転室のモーグリ博士の声が伝声管から流れて来る。怪タンクの動きを監視する者、突風の渦の中にあって、空中列車第二号は凄まじい大奮闘を続けていた。「あっ！怪タンクが突込んで来た。このまゝでは衝突だっ！」監視員の一人が、けたたましい叫び声をあげた。「よろしい。全部ロケットに分離しなさい」モーグリ博士の命令が下された。今や怪タンクは死にもの狂いで空中列車の後尾部めがけて片腕をぶっつけて来たのだ。





⑨ グヮーン、大音響とともに、天空に飛び散る空中列車第二号。間髪をいれず空中列車からとび立つ小型ロケット。空中列車第二号を破壊してしまったと喜んだのも束の間、やにわにとび出して来たロケットを見て、怪タンクは、瞬の意外に肝をつぶした。怪タンクは、かえって反撃に転じて来た小型ロケットの攻撃に、振りあげた片腕のやり場に困った態であった。



⑩「ややっ、味なことをやりおるな。しかし逃げようとしても駄目だぞ。ゴロロン、ゴロロン、えーいっ。」と小雀を襲う荒鷲のごとく、怪タンクは、モーグリ博士やまさるたちの乗り組んだ小型ロケット機めがけて躍りかかっていくのであった。鋼鉄のみにくい化物の巨大な腕を振りまわしながら、追っていくのだった。



⑪ あわや危うしと見えた刹那、雲間を縫って急降下して来た空中列車が数列車、小型ロケットに迫る怪タンクの背後から、ザザーン、ザーンと猛砲撃をあびせかけた。たちまち怪タンクは、グヮラグヮラとエーテル・ポケットの深淵に落ちこんでいく。一方でも、いてあましていたQ遊隊は、新手の出現に、これはかなわぬと雲を霞と逃げだしたのである。「おおっ！小型ロケットに分乗して危機を脱けたか。よかった。間にあってよかった」と、さすがの大木探偵や蛇王も、喜びの声をあげた。再び、王冠団に凱歌があがった。

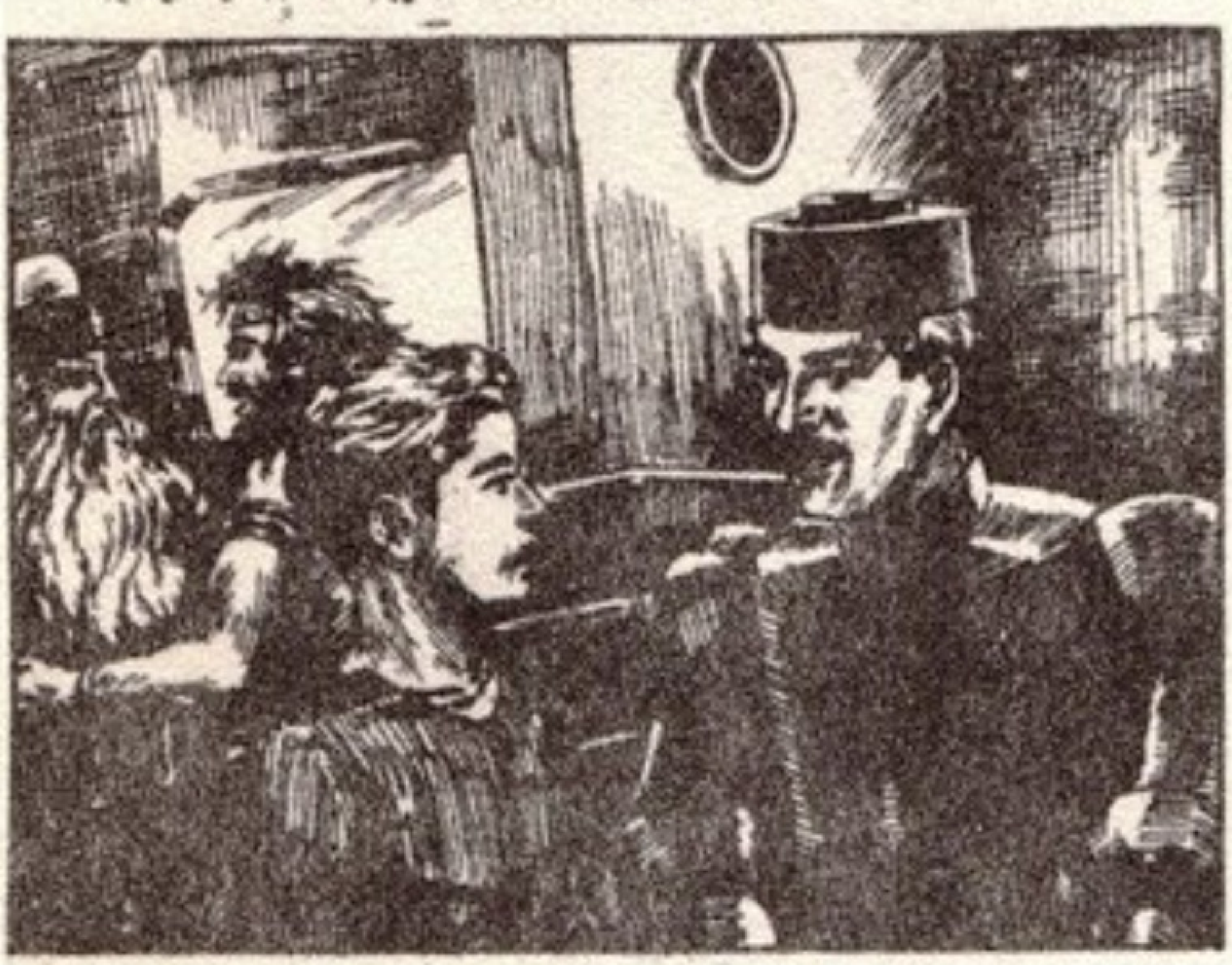


⑫空中に退避していた小型ロケット隊は、それぞれ救援の空中列車に收容された。シァ女王は大木探偵にむかって、「大木さん、ありがとうございました。何度も何度も助けていただきましたのね」と、厚くお礼を述べた。まさるやかず子、さては地底国の人気者アクちゃんも喜びの涙をうかべて、大木探偵にとりすがった。久方ぶりで逢う事の出来たまさると大木探偵の瞳には、感激の涙がひかっていた。モーグリ博士も又、蛇王の手を握って、「いや、怪タンクの奴の無茶苦茶ぶりには驚いたよ。もう、すんでのところで危ないところだったが、小型ロケットが備えてあったので命びろいを致しましたわい」と喜びあうのであった。大空の激闘が終るころ、遙か下方の西の空が、眞赤に焼けて、空中列車第一号内の一同をあかあかと照らしだしたころ、怪タンクやQ部隊の悪者共一味は一路、奈落地獄へ轉落していくのであった。



⑬「お父さん、黄金バットの小父さんが教えて下さってよかったですね。でも、下へ落ちていったナゾーやドブロクスキーはどうなったでしょうか」と、まさるが大木探偵に話しかけた。

「いや、したたか者の奴等のことだから、多分参るまいと思うよ。気を失なったところ位だろう。まだまだ今は油断は出来ない。もっともナゾーやドブロクスキーの奴等は生け捕りにして、日本に連れて帰らねばならないのだから死なれては困るがね」と、大木探偵が愉快そうに語っていた。おお、地球上へ帰るのだ。然も、なつかしい日本へ帰るのだと聞いてまさるは大喜びだった。この時、突如けたたましいブザーが鳴り響いた。



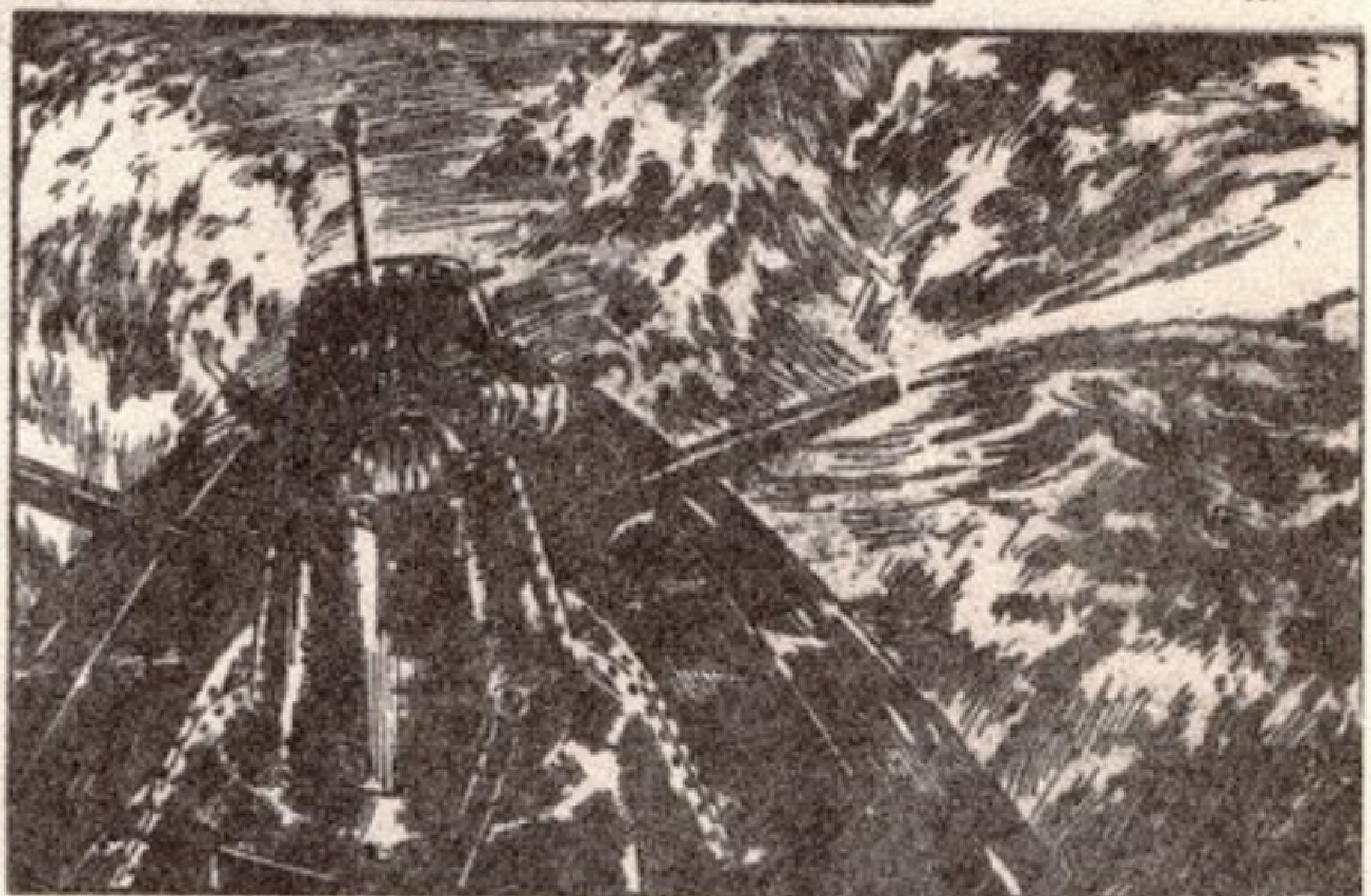
⑭レーダーをのぞいていたモーグリ博士が、ぱっとして椅子て、「大小二個の影が映っていますぞ。至急、對敵警戒配置につきましょう」と、叫んだ。

たちまち、空中列車の各列車の隅隅に非常警戒警報が発せられた。おお！何ものの出現だろうか。今しも、宵闇に沈んでいく遙か下の雲間を押し分けて、ぬっと突き出る砲身……。

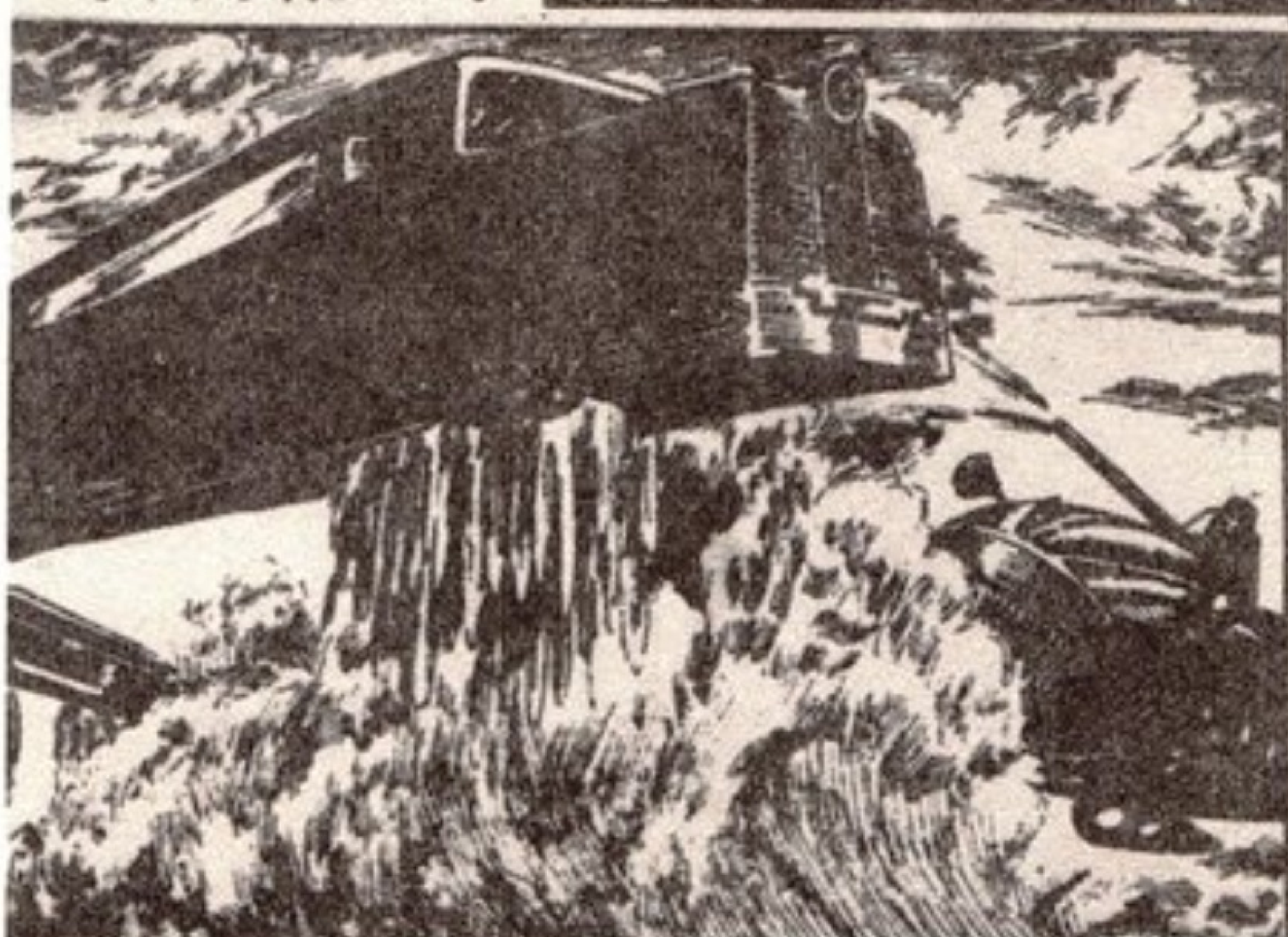




⑮とたんにドドーンと、続けざまに起った響音とともに、空中列車の下部の推進機関をめがけて、トロケ弾丸の集中攻撃が始まった。「おおっ！嫌に早く立ち直ったのう。こちらも敵軍師だ。」悠揚せまらず命令するモーグリ博士がはてと不審そうに小首をかしげた。ズズダーン、ズズダーン、トロケ弾丸は、この時とばかり、空中列車の異空艇の届かぬ先に打ちだして来る。あわや、又もや、危機に瀕したかと思われた空中列車群……。



⑯異空艇射撃で、ひとたまりもなく、その機能を破壊されて下界へ落下して行った筈のQQ母艦が、異空艇のエア・ポケットの中をも平気の平左で、猛然と上昇して来るではないか。「うわっはっはっはっー！どうだ。驚いたか。QQ母艦さまには空気発射装置を持っていることを知らなかったな。異空艇射撃なんぞの小細工に驚かされてたまるものか」と、不敵にあざ笑うのは、Q一司令長官、先程の大失敗にこりずに、又もや急所を修理して攻撃して来たのだ。Q一司令のまわりをとりまいたナゾー一味やクーロ大王親子などが、どっと鬨の声をあげてはやしたてた。



⑰グヮーッ、ズシーン。物凄い震動が空中列車をゆるがした。トロケ弾丸の一発が、空中列車第一号の推進機関に命中したのだ。トロケ弾丸は、たちまちドロドロに融けて、空中列車の推進機関をとかして終った。ああ！空中列車が、空中を走るための大事な大事な推進機関をこわされて終ったのだ。ギギーギーッと、にぶい音をたてて、空中列車の進行は止って終った。これは、大変な事になって終った。空中で進行を停止した空中列車は、トロケ弾丸の絶好の的である。唯一つの攻撃武器、異空艇はもはやQQ母艦に対しては、何等の役にもたたなくなって終った。列車の進行が止った以上、異空艇の機能も停止して終ったからだ。大木探偵一同の乗った空中列車第一号に絶対絶命の時が迫った。



⑬ 空中列車第一号の中では、けたたましい警報器の響に、「全員、ロケットで脱出用意。」と落ち着いた大木探偵の声が響いた。勝ち誇ったQQ母船は雲の上に全貌を現わして、その巨口から空気を吐きだして、機体の周囲を厚い堅い空気の壁でとりかこみ、他の空中列車の対空攻撃を防ぎとめて終った。QQ母船から打ちだす第二、第三のトロケ弾丸は、いんいんと大空をゆるがせながら空中列車の推進機関を次々と破壊していった。突如、「ウワッハハッハッウワッハッハッハッ、ソーラスよ。赤色第二光線を発射せよ」と、おごそかな黄金バットの声がひびくとみるや、雲間から颯爽と躍り出したエーア・ソーラスは、QQ母船めがけて強力無比な赤色第二光線をあびせかけた。みるみるうちに、QQ母船の先端部は白色の焔をあげて燃えはじめ、内部は、阿鼻叫喚の地獄と化し去って終った。

「ギャオーッ。くく苦しい。救けてくれーい」と叫ぶ怪魔Q人とターマ一族、「お救け下さい。闇黒の魔王さま」と絶叫する苦しげなナゾー一味の声も聞えて来るではないか。

おお！食うか食われるか。大空に勝敗を決せんと大激戦を展開した正義対邪悪の大闘争はいよいよ正義団の前に邪悪団は地球上に撃墜される運命となった。四月号少年画報を御期待下さい。

黄金バット 科學魔篇

永松健夫・作画



☆前号までのあらまし☆悪の権化ナゾー一味は天空のクーマ大王と力を合せ、全世界を悪一色にしようとしたが、これに対して正義の味方黄金バットと大木探偵セーグリ博士等は空中列車をひきいて敢然と邪悪の一味に立ち向かった。マオー星の上空では、正義の味方を乗せた空中列車とナゾー一味が乗ったQQ号との間に凄じい闘いが続けられていた。空中列車の最空砲のために一度は撃退されたQQ号も空気砲射器を装備して立ち直り、逆襲して空中列車の推進機関を破壊してしまった。機能を失った空中列車の進行は止った。せっな言間を縫って舞い降りて来たエーア・ソーラスは、勝ち誇ったQQ号めがけて強力第二光線を発射した。QQ号はみるみる灼熱し、火の玉となって悪人一味を乗せたまま底知れぬ大宇宙の暗の中に墜落していった。

①見よ、火の玉と化して落下して行くQQ号の姿を！そのあわれな様相こそ積悪の罪を負う者として、当然あがなわねばならない敗者の姿であろう。

「ワワッハハッ、ウワッハッハッハッ。悪人共よ、思い知ったか、汝らが墓場は、はるかなる地球の太平洋なるぞ。太平洋の怒濤は汝らの罪をきよめてくれるであろう。いざ行け、汝らの最後の場所へ……」と、エーア・ソーラスの背上にすっくと立った正義の神黄金バットの声が、撃墜されたQQ号のみじめな姿を追うように響き渡った。



②「ソーラスよ、我等の任務はまだ終らぬぞ。空中列車に乗っている人人を救い出さねばならぬ。早く救い出し、全部收容したなら、クーマ王宮殿へ行くのだ。ソーラスよ、急ぎ活動開始せよ!!」黄金バットはエーア・ソーラスに向かって声高く叫んだ。聞くより早く「ウオアーッ」と吼えたエーア・ソーラスは、QQ号のトロケ弾丸によって推進機関の機能を失って空中に停止する列車めがけて飛び立った。



③みなの者、ソーラスに乗りうつるがよい。我らは魔王の去ったクーマ国の人人に安心を与えねばならぬ。悪魔共が荒していたクーマ国を平和な国に立返らせてやらねばならぬのだ」空中列車の窓近く身を寄せた黄金バットは、逞ましいソーラスの働きに呆然とみとれていた大木探偵らに声をかけた。そして「ソーラスの口中より機中に入れ。心配はない」と搭乗をすすめるのであった。エーア・ソーラスは巨口をあいて、各船中の地球人たちを呑みこみ、金色のうろこをきらめかせつつ、再びクーマ王宮跡にむかった。



④威風堂堂と地上におり立ったエーア・ソーラスの機中から、真先におどり出たまさるとブクちゃんは、早速大喜びで宣傳を始めた。「えー、クーマ国のみなさん、私どもは、はるばる地球からやって来た者です。今まで皆さんを苦しめていたクーマ大王やナゾー一味の悪人共は、正義の味方黄金バットの助力を受けて私たちがみな退治してしまいました。どうぞ喜んで下さい。みなさん、私たちはあなた方クーマ国の方達の味方です。これからあなた方が、平和な民主的クーマ国をつくりあげるのをお手傳い致します。みなさん、どうか安心して、喜びをもって働いて下さい。あなた方の中からどなたか代表を選んで下さいませんか。その人と私達はいろいろご相談がしたいのです」

エーア・ソーラスの異様な姿に魔手をぬかれ、恐れにおののき震えていたクーマ人達は、まさるやブクちゃんの宣傳に、おそるおそる集り寄ってきたが、その言葉をきいて大いに喜んだ。



⑤クーマ国をあらしに来た悪魔の襲来！と思って恐れおののいていたが、この地球人達は、自分達の味方だったのか。と、はっと安心したクーマ人は、今まで見たこともないまさる達の異様な服装を物珍らしげにさわってみるのであった。やがて代表が選出されたとみえ、長老らしい一人のクーマ人が進みでて、まさるに向い、「ただ今のお話により、クーマ人の代表にえらばれたドンブラと申す者でございます。つきましては、あなた方の代表の方に、おひきあわせ下さいませんか」と、申し出た。



⑥地球人からはセーグリ博士が進み出て、ドンブラと固い握手を交した。「私共はあの憎いクーマ大王に散々いじめられました。あれを退治して下さって、本当に有難うございました。殊に最近は地球から来たナゾーと一緒になり、また隣星のQ大王とまで気脈を通じて近隣の星をあらしまわり、クーマ人は兵隊にされたり、重い税金をとりたてられて食うや食わずのひどい生活になってしまいました。おかげ様でもう安心です。この上のお助けをお願いしては申訳ないのですが立派なクーマ国を作り上げる為に、何分のお力ぞえをお願いいたします」と、ドンブラはいった。



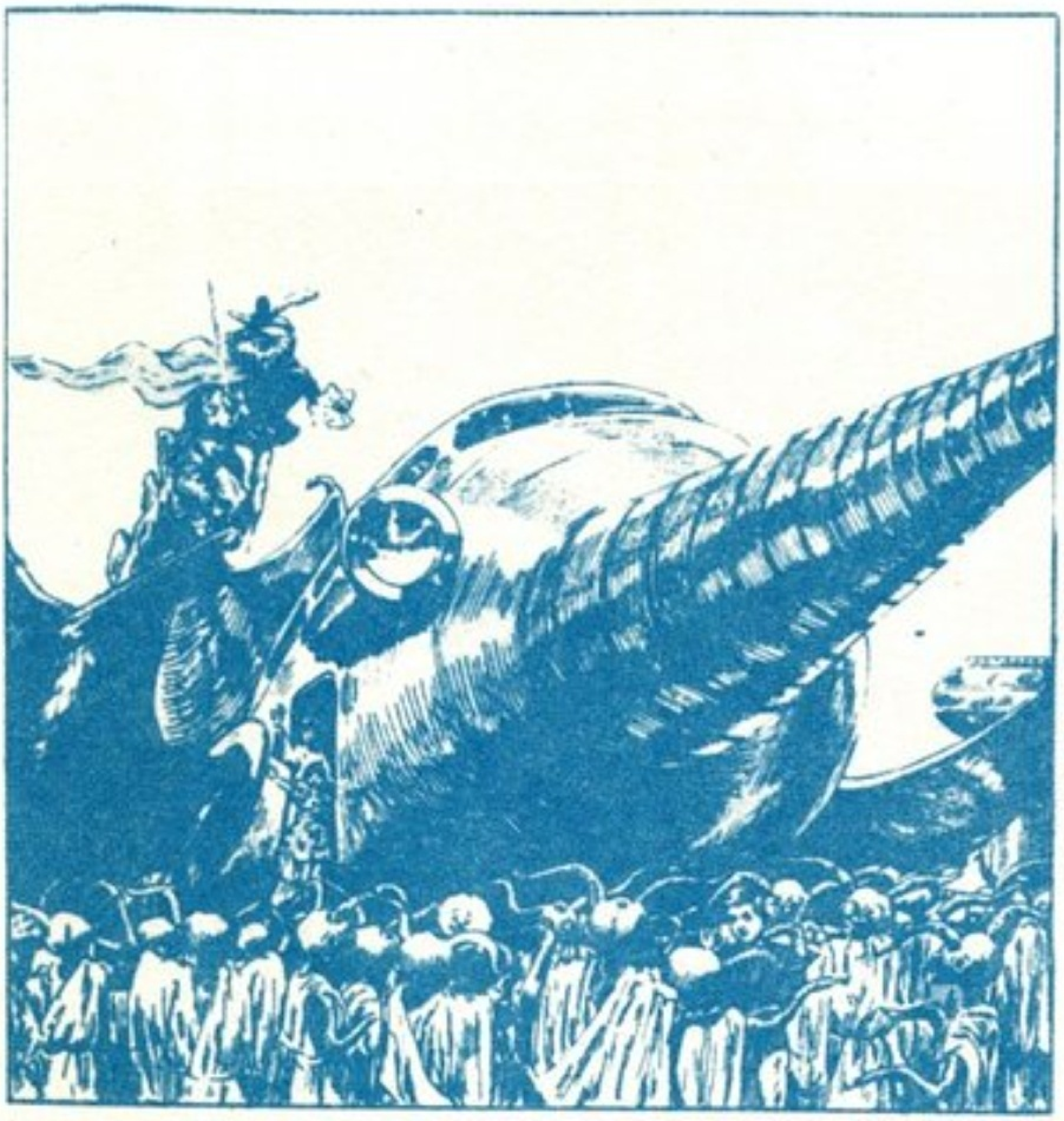
⑦「御安心なさい！　もう大丈夫です。正義の使徒神人黄金バットの威力をかり、また地球でわれわれが研究した科学力を駆使して、みなさんのために万全の力を盡しましょう。若しあなた方が平和に働くために必要であるなら、地底国が持っているコーカスでも、充分に差し上げましょう。しっかりおやりなさい」と、地球人を代表してセーグリ博士は、ドンブラの肩を叩き心からなぐさめはげましてやるのであった　ドンブラの胸中は嬉しさで一杯であった。



⑧かくして、乱闘によって見るかげもなく打ち壊されたクーマ国の復興がはじまった。クレーンの響、ウーウー唸るモーターの音は明るく空にこだまして、平和なクーマ国が再び築かれて行くのであった。G・M号の修繕も着々と出来て、まさる達が地球に帰る日が近づいた。

地底国の宝庫にむじんぞうに埋蔵されているコーカスもクーマ国の平和建設にはかくことの出来ないものである

このコーカスをクーマ国に持って来るためにも、地底人たちは一度帰らなければならなかったのである



⑨ 宇宙船G・M号の出発の日は来た！ 青青と晴れ渡った空の下で、白く輝くクーマの首都市、そのヌウクラ飛行場には、多勢のクーマ人が別れを惜んで見送りのために集って来た。黄金バットも紅に燃えるマントをひるがえした凛凛たる英姿をエーア・ソーラスの背上に見せていた。違った星に住む人間ながら、心からの友人として親しみなじんだクーマ人と今別れるにのぞんで、シマ女王やかず子は悲しみの涙にくれた。仲よく遊んだクーマ国の子供らと泣きながら抱きあうまさるやナクちゃん。思いは同じに大木探偵も蛇王も、モーグリ博士も、じっと別離の悲しみに堪えているのであった。

出発を知らせるドラの音が響いて来た。"さらばクーマ人よ、けんざいで暮せよ！ とこしえに平和であれよクーマ国!!"と、黄金バットはエーア・ソーラスの背の上から別れの挨拶を送った。G・M号はぐらりと一ゆれして、その巨体は大空に舞い上った。



⑩ G・M号は首都ヌウクラの上空で、一度二度、悠悠と旋回してクーマ人に別れをつげ、彼らの歓呼の声に送られながら機首を東に向けた。天界をあらす悪魔をほろぼすという大使命を果し得たモーグル博士一行を乗せたG・M号は、今やふたたび雲煙万里をこえ、遙かなるなつかしの地球への帰途についたのである。

刻一刻と速度を増したG・M号は、はやくもマオー星の成層圏内に入った。紫紺色にたたずむ大宇宙の静寂の中にひびくはG・M号の爆音だけであった。

長途の旅につつがなきや否や？

しかし、無限の彼方からじっとG・M号をみつめる黒い眼。黒い手と足。それこそは悪魔の眼、悪魔の手足であった。無気味な悪魔はまたもやその手をのばし、すでにG・M号の胴体にしのびよっていたのであった。危機迫ることを知ってか知らずか、G・M号は更に速度を早めて、父を、母を、子を案じ又新しき平和国の建設を計画している人人を乗せ、一路地球へ地球へときらめく星座をぬって飛びつづけて行く。



⑪　突如、G・M号のエンジンの音がはたととまった。操縦席のモーグリ博士はいぶかしげに首をかしげてエンジンの点検をしたが、どこにも故障はなかった。G・M号のうしろから飛んで来たエーア・ソーラスの羽ばたきも同様にやんでしまった。
不思議!!不思議!!G・M号もソーラスも飛ぶことも出来ず、といって、ついらくもしない。空中に釘づけになってしまったのである。何者の仕業だろうか?

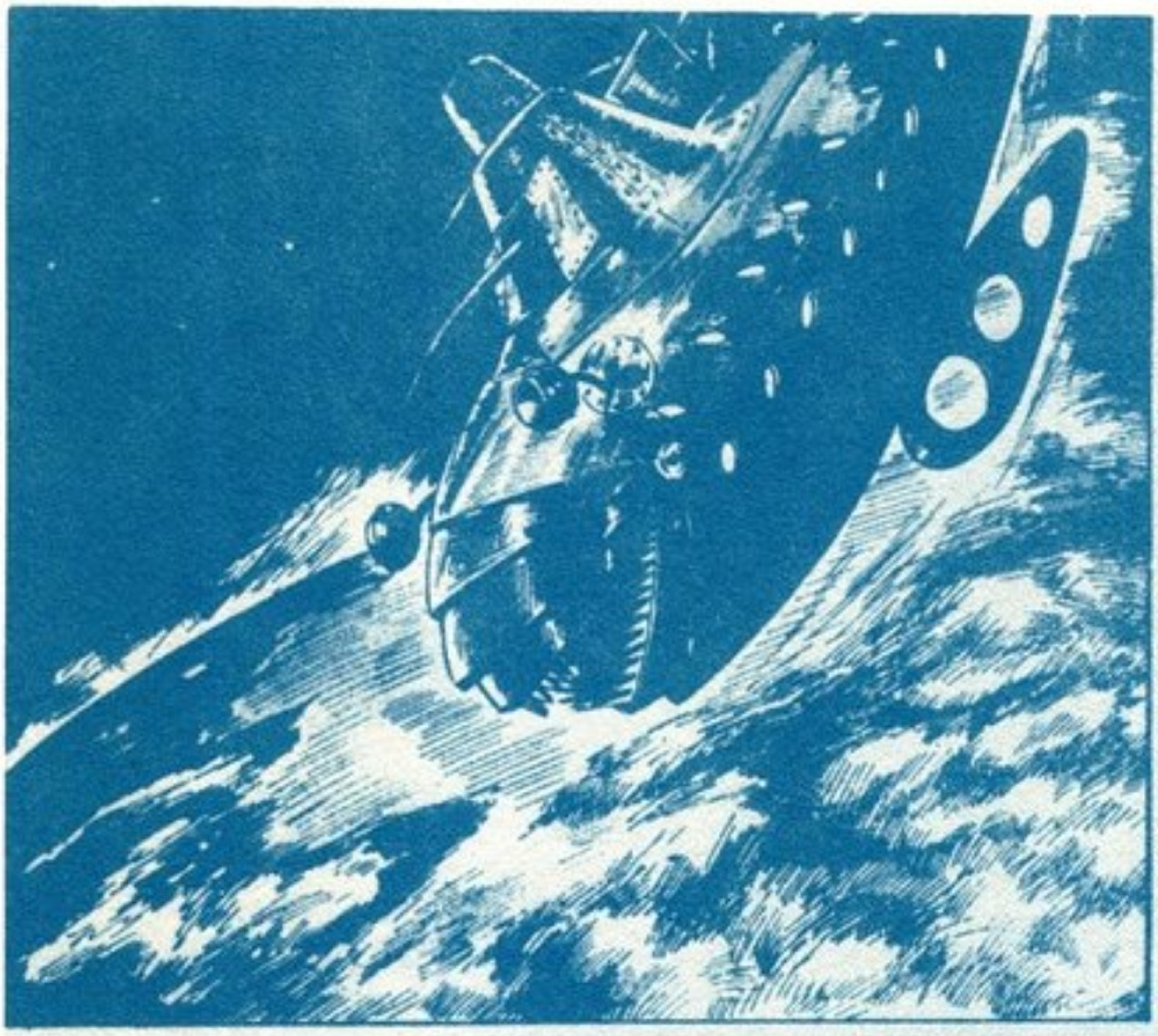
⑫　操縦席のブザーが異様になりひびき出した。ザーッ、ガーッ、ダァーッとスピーカーには雑音が入っていたが、やがてそれは明瞭な言語となった。「おまえたちは地球に帰ることは出来ない。そこにそのままとどまっていなければならないのだ。クーマ一族やナゾーたちの運命がはっきりするまでは地球へ戻ることは許されないのだ。今余の友人が彼等をさがしている。彼等が生きていればよし、若し死んでいたなら、おまえたちも同様死なねばならないのだ。しばらくそこにとどまっているがよい。もはや逃げる事は不可能であるぞ。この大宇宙で余にそむくことの出来る者はいないのだ。よいか、わかったか。余の名は科学魔サイエンス・サタン、SSだ。」不気味な声は終った。又して現われた見えざる新しき強敵SSのためにG・M号とソーラスは空中に固着されてしまったのだ。





⑬　やがてG・M号とソーラスのまわりにどこからともなく濃黒な霧が立ちこめてきた。そうしてそれは、いつしか機内にまでしのびこんで搭乗者をおしつつんでしまった。濃黒な霧につつまれた機内の人人はいつかこんこんと深い眠りにおちいっていくのであった。見えざる魔の手のしわざである。
ソーラスも又その重い瞼をとじて眠ってしまった。ソーラスの腹中にいる黄金バットさえもこれを逃れることは出来なかったのであろう。そこには物音ひとつしない静寂そのものだった。
今や飛翔をとめられ、黒い霧の中にとじこめられたG・M号とエーア・ソーラスは次に来るべきおそろしき運命をただ待つばかりである。





⑱大宇宙を火の玉となって、ひたむきに落下しつづけたQQ号は、つめたい大気の中で冷却され、その艇内には今まで苦しみもがき、うめいていたクーマやナゾー等の声もせず、ただ真黒な塊と化し去って〝悪魔の墓場〟太平洋のさかまく怒濤の真只中に突入していった。はたして黄金バットの予言の通りに。

幾億万哩の大空から落下してきたQQ号は、すさまじい水煙をあげて千尋の海底深く深く沈んでいくのであろう。これはあらゆる暴ぎゃくの限りをつくして、善良な人人を苦しめた悪人共の、最後をかざるにふさわしい情景であったかも知れない。



⑲太平洋の真只中を、なおもものすごい勢で沈下していったQQ号の艇体は、途中まで来た時、急に停止した。それは白色の密林の中にいりこんだのである。QQ号の巨体をすっぽり呑みこんだ白色の密林とはそも何であろう？ そは海蛇の如く、いかの足の如く、うねりそよぐ高さ数十メートルの無数にからみあう長大な海底のひげの如きもの!!

しかもその時、QQ号をその中におしつつんだ白色の密林は、奇怪にも徐々に移動をはじめたではないか。ふわりふわり海中を浮動する大密林、これは果して動物なのか、植物なのか、はたまた新機械なのか？ 読者諸君よ。この謎の解明はしばらく待たれよ。やがてまもなく諸君の前にその正体を示すであろう。

見えざる魔手に空中に爆撃されたG・M号とソーラスにせまる次なる運命や如何に!!
又悪人共を乗せ海中深く落下していくQQ号をとどめた白色の密林とは？ 興味津々号を追って怪奇作境へ、何卒次号を期して御待ち下さい。

黄金バット（科學魔篇）

永松健夫・作画



☆前号までのあらまし☆

大木探偵やヤーマ博士たちは、黄金バットの助けをかりて、マオー星上に暴威をふるうターマ大王の一味の乗ったQQ号を地球上に撃墜した。[illegible]と、黄金バット一行が地底國めざして帰途についた時、突如見えざる敵、科学魔サイエンス・サタンSSのため、途中にくぎづけにされてしまい黒い翼につつまれて、乗員七名はこんとうしてしまった。一方太平洋の眞只中に墜落したQQ号は、海中の怪しい白色の密林に包みこまれていた。

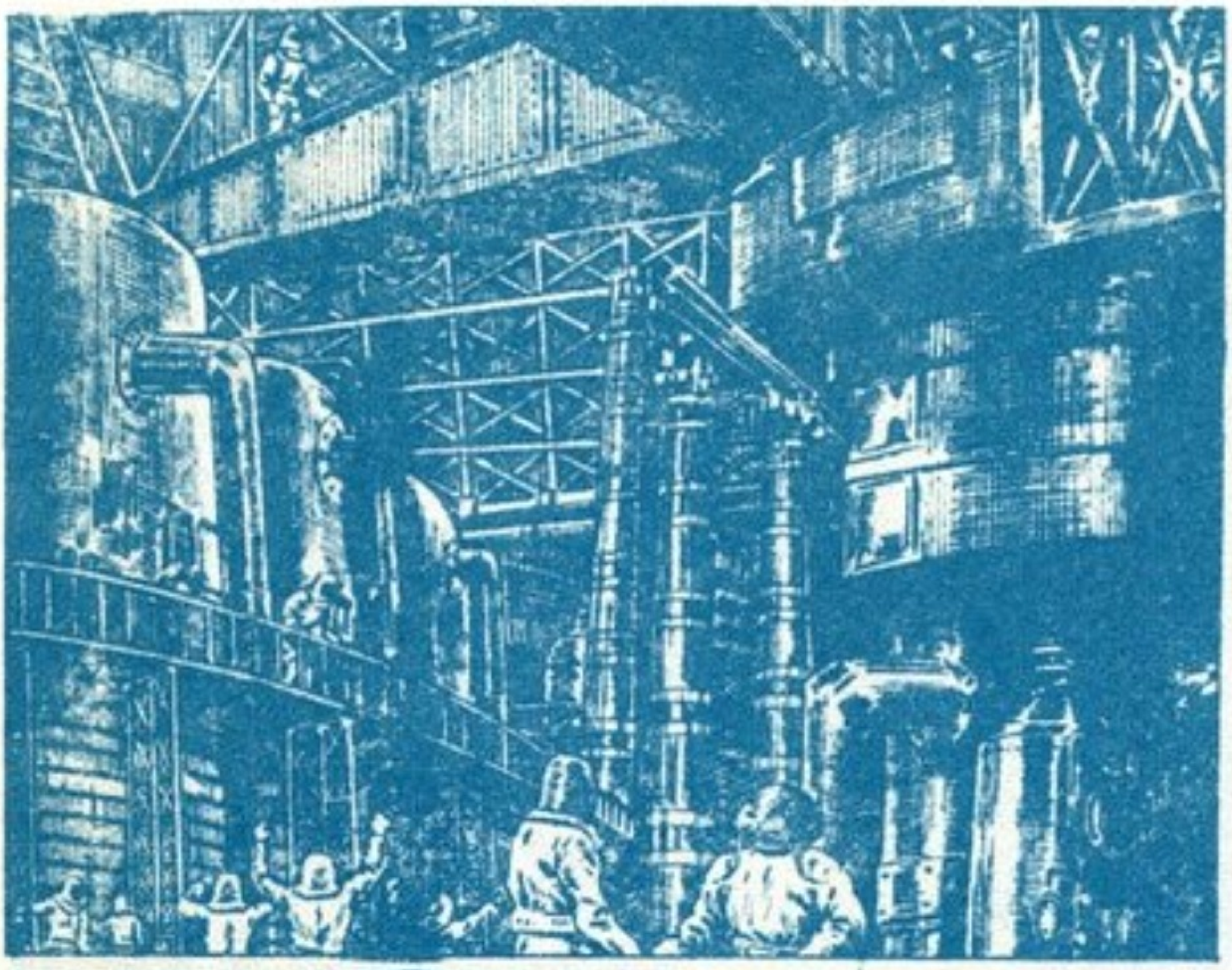


(1)海底の淡い光りをうけて、描き出された影相は、夢のように不思議な眺めであった。密林に似た白色の怪物はQQ号を包みこむと、ゆるやかに海中をうごきはじめた。約二百キロばかり移動した時、白色の密林はその歩みを止めた。巍然とそびえたつ鉄壁の前に出たのである。



(2)やがて、鉄壁の一部がグー・と押し開かれたかと思うと、白色の密林は、その中にすいこまれるように入って行った。

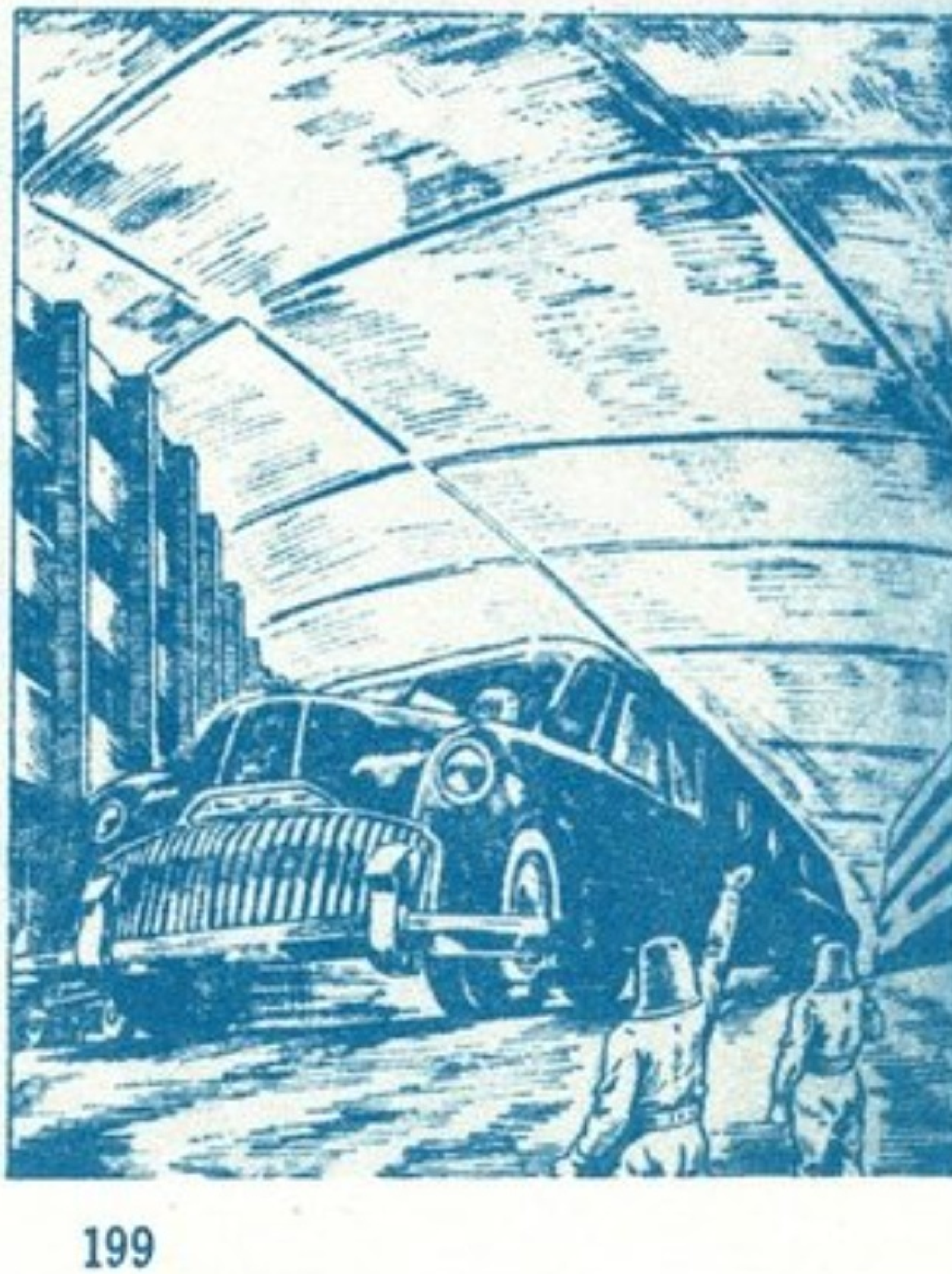
廣い部屋の中には、さまざまな機械がならべられ、その間を異様な服装をした者たちが右往左往しながら立ちはたらいている。



（3）突然、ドアがサーッと開いて一人がかけこんで来た。奥まった席にかけている一人に向かって、「ナマズー場長、報告します。只今偵察機八十三号がQQ号を収容して帰来しました。」「よろしい、QQ号内の人間を救助しなければならない。すぐに病院へ運べ。そして、カイリ院長に直ぐ手術を頼むと通信するように……。」

（4）高高と、そびえている鉄骨の間に、透明なガラスのようなものがはりめぐらされ、青い空がすかして眺められる。さいいさんとふりそそぐ日の光をあびて、救急車が一台、舗道の上にクッキリ黒い影をおとして走ってきた。QQ号の乗員を病院へ運んでいくのだ。





（5）猛烈なスピードで一キロばかり突き進んだ救急車は、Hと印された舗道の上で急停車した。すると、舗道は救急車を乗せたまま、スルスルと沈下していった。



(6)カイリ病院長の執刀で手術がはじまった。ベッドの上にはナゾー、お鮭、お光、クーマ大王の一族達の、大備の死体？が横わっている。人工心臓の装置、人造皮膚術を施して、焼けただれた彼等をよみがえらせようとするのである。時時メスが無氣味に光って、手術はすすめられていった。

(7)一週間ばかりたったある日、ナマズー場長の卓上電話がけたたましく鳴った。

「ほほう、地球人の方は生きかえったけど、天体人類の方は駄目だったと。……なるほど、なるほど、大変ごくろうだった。とにかくわが海人科学の勝利じゃ。早速地球人をこちらへ戻してくれ給え。」

(8)しばらくすると、すっかり元氣になったお蝶たちが、ナマズー場長の所へあらわれた。

「場長さん、おかげさまで助かりました。有難うございました。ところで、ここは一体どこですか。」

「ここは洋上の浮城、わが海人科学の粋をこらした一大科学島です。よび名をサイエンス・アイランド、略称SIともいい、海中沈下も自由です。」







(9)「外の景色を見ますか。」ナマズー場長がそう言って、卓上のボタンを押すと、壁の一面がスクリーンになっていて、ありありと外の景色が映し出された。おお、それはまさしく母國のN國F山の姿ではないか。



10 場長はそれを見ながら言った。

「SSをはじめ、我等一同も又地底國が持つコーカス資源が欲しいのです。コーカス資源はあなたの國の地下、地底國にのみ殘されているのです。それを手に入れようとして、ターマ大王は、ついに大切な生命を失われました。が、しかし、我我はコーカス資源を手に入れるまでは、どんな犠牲をもいといません。このことについて、貴方方の助力を求めたいのです。貴方方が承知下されば、絶対姿を見せないSSにもお引合わせしましょう。」

「いや、よくわかりました。地球上の陸地世界を我等にお任せ下さるなら、何分の助力をいたしましょう。」と、ナゾーが答えた。

(11) 計り知れぬ大宇宙の一点に、進行を止められているG・M号艇内では未だ全組員一同がこんこんと眠りつづけていた。黒い闇は何時しか晴れて遠く近く無数の星がまたたいていた。と、同じくG・M号のそばに静止していたエーア・ソーラスの巨口から、ヒラリと身をひるがえした黄金バットがG・M号に乗り移った。



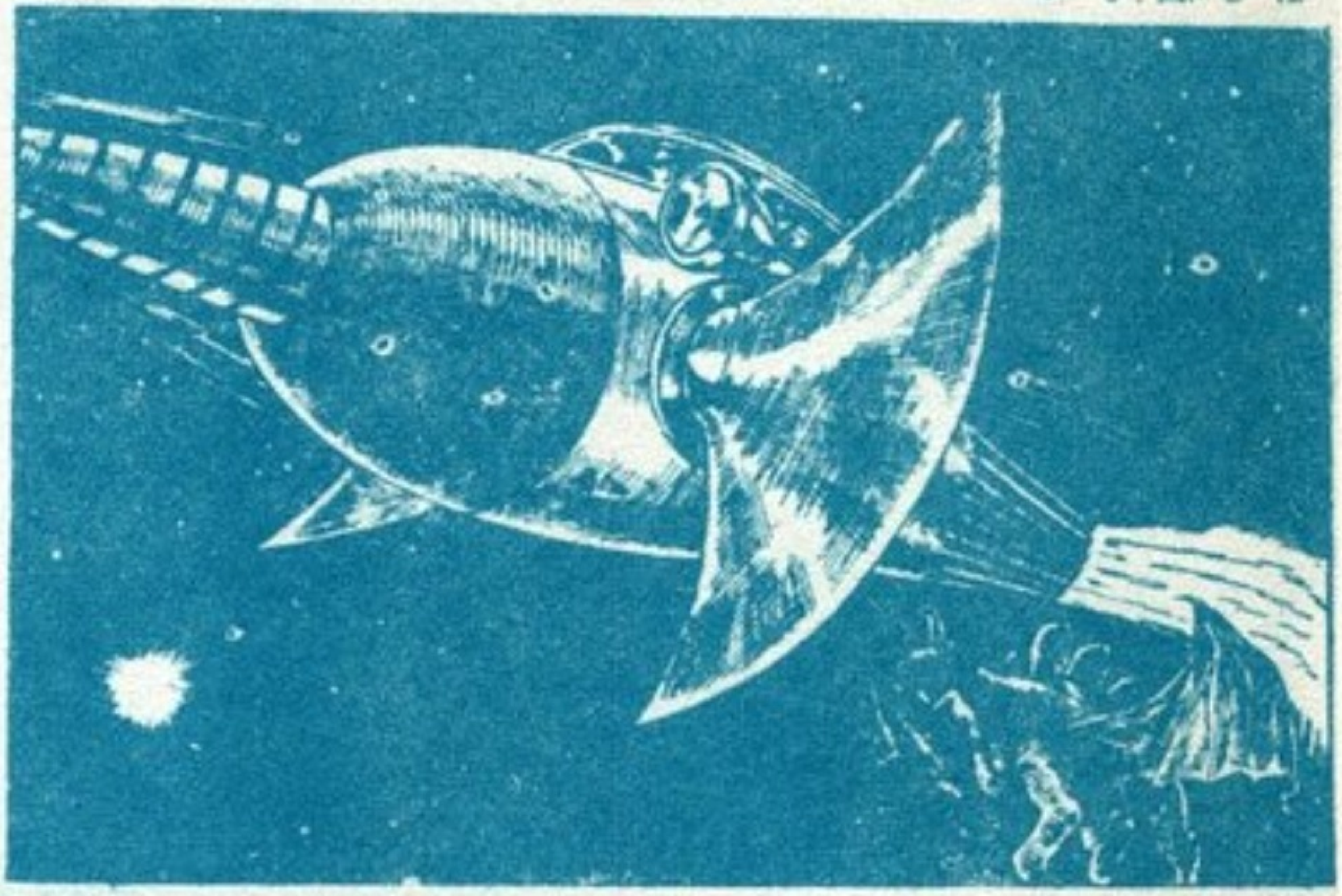


(12) 黄金バットは懐中から白く光る丸薬を出して、床に倒れているセーグリ博士や、まさる等の口中に含ませた。丸薬が唾液に混って胃の中に流れていった時、「ウームッ。」とうめいて、まさる等は昏睡からめざめた。

「おお、皆の者、氣がついたか。我等の前に新たなる強敵が現われたぞ。」



(13)黄金バットは更に言葉をつづけて、「奴は宇宙線の操作をして、我等の進行を止めている。しかし余の持つ黄金杖には、これを突破する抵抗器が備えてあるから、このセットをG・M号の機関にとりつけよう。モーグリ博士よ、急いでやってみてくれ。」黄金バットから杖をうけとった博士は、さっそく操作にとりかかった。



(14)宇宙線抵抗器を備えつけたG・M号は、再び活動をはじめた。艇の内外をひしひしととりかこむ見えざる魔手の宇宙線を排除して、地球へ地球へと艇はつづけられた。エーア・ソーラスは宇宙線の放射地帯を突破するまで、G・M号が曳いていくことになった。



(15)G・M号はようやく宇宙線放射地帯を突破した。エーア・ソーラスが生気をとりもどした時、宇宙線抵抗器はG・M号のエンジンから取りはずされ、黄金バットの黄金杖にかえされた。黄金バットは再びソーラスの背上にもどった。地球は行手に大きく光り輝やいている。おお、祖国は目の前だ。



(16)突如としてG・M号の周辺を眼にもあざやかな光の環がとりかこんだ。光の環は刻一刻とその円周をちぢめ、G・M号に迫ってくる。ガッガーン、ガッガーン、光の星ともいいたいつぶてが、G・M号の機体めがけてぶつかってきた。





(17)セーゲリ博士がジグザグコースをとって、方向を変更しても、光の環はG・M号をしつようにとりまいて離れない。光りのつぶては流星雨あられと襲いかかる。おお、流星の大群が、G・M号の外装を覆う特殊合金に磁氣を合わせて襲いかかったのである。

（次号につづく）

恐るべし、見えざる敵の魔手は第二の攻撃にうつった。G・M号は如何にしてこの場を逃れんとするか？マサル少年の運命は？黄金バットの活躍は？

ここに、大長編『黄金バット』は
永遠の未完に終った……



永松健夫（本名武雄）

大正元年三月一日、大分県中津市福島小平に生まる。

芝浦高等工芸図案染色科卒。

昭和三十六年十一月十七日、胃癌にて死す。

代表作

黄金バット　日輪童子

黄金バット　天空の魔城・彗星ロケット　590円

著　者　永松健夫

発行者　矢貴昇司

印刷所　創生社印刷所

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蠣殻町１－12
電話(666)4001～２振替東京64351

昭和50年５月１日　印刷

昭和50年５月20日　発行

(分)0071(製)175106(出)5180